

松江市文化財調査報告書第54集



う　む　か　ひ　め

伝宇牟加比売命御陵古墳

1993年3月

松江市教育委員会

伝宇牟加比充命御陵古墳 正誤表

頁	行	誤	正
5	表中 No.12	吉岡浜之助宅前古墳	吉岡兵之助宅前古墳
12		(第11図のスケール) 10 m	10 cm
14	20	第14・15図	第15・16図
15~16		(第13図のスケール) 10	1 m
17	24	第16図	第14図
18		(第15図のスケール) 10 m	10 cm
19		(第16図のスケール) 10 m	10 cm



伝宇牟加比壳命御陵古墳全景



造り出し部出土須恵器

例　　言

1. 本書はニシキ産業株式会社の委託を受けて、松江市教育委員会が平成4年度に実施した伝字半加比壳命御陵古墳発掘調査の報告書であり、松江市文化財調査報告書第54集にあたる。
2. 発掘地は次のとおりである。

島根県松江市法吉町鶯谷

3. 調査の組織は下記のとおりである。

委託者	ニシキ産業株式会社	代表取締役	佐藤 國治
受託者	松江市代表	松江市長	石倉 孝昭
主体者	松江市教育委員会	教育長	諏訪 秀富
事務局		生涯学習部長	松尾 光浩
		文化課長	中西 宏次
		文化財係長	岡崎雄二郎
調査員		文化財係主事	金山 正樹
		嘱託員	瀬古 謙子

4. 調査の実施に当たっては、次の方々の指導及び助言と協力を得た。記して感謝の意を表する次第である（敬称略）。

調査指導者 山本 清（島根大学名誉教授）、角田徳幸（島根県教育庁文化課主事）
助言者 三浦 清（島根大学教授）、渡辺貞幸（同教授）、菱田哲郎（京都府立大学講師）、西尾克巳（島根県教育庁文化課第3係長）、柳浦俊一（同主事）、木下 直（福原考古学研究所）

調査協力者 松前 壮（株式会社森本組）、小原礼二（同）

5. 本書で使用した遺跡の地形図、及び遺構の実測図の方位は磁北を示す。
6. 出土遺物については、遺物の種類毎に通し番号をつけ、実測図と写真の番号が対応するようにした。
7. 本書の執筆は、金山、瀬古が分担し、編集は、金山の協力を得て瀬古が行った。
8. 出土遺物及び実測図、写真はすべて松江市教育委員会で保管している。

目 次

I. 調査に至る経緯	(金山)	2
II. 位置と歴史的環境	(金山)	4
III. 調査の概要	(瀬古)	7
1. 墳丘の規模、形態		10
2. 墳丘基盤と墳丘の盛土		10
3. 内部主体		10
4. 外部施設		14
1) 造り出し		14
2) 造り出し以外の円筒埴輪		21
IV. 考 察	(瀬古)	25
1. 遺構の検討		25
2. 遺物の検討		27
V. ま と め	(金山、瀬古)	32

文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会(現文化庁)が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である柱脚、すなわち昇と階の組み合わせによつて全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していくというものです。





伝宇牟加比売命御陵古墳の位置

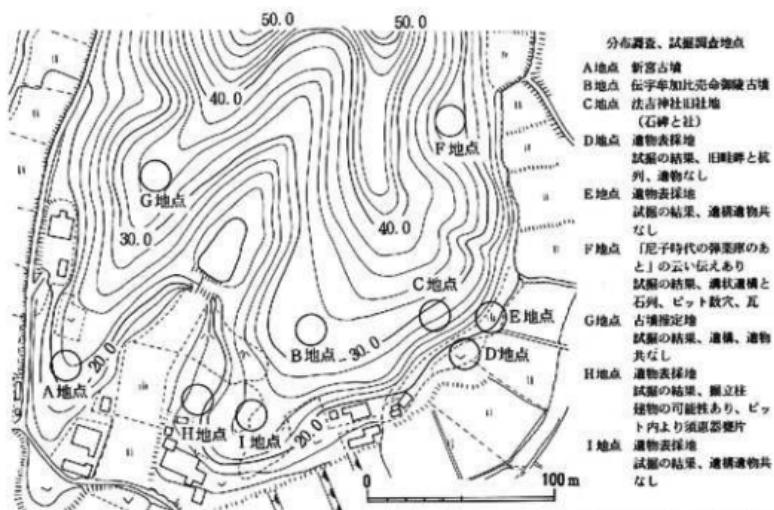
I 調査に至る経緯

ニシキ産業株式会社は、平成2年に至り、松江市法吉町の字鶯谷地内を対象に「うぐいす台」団地の造成を計画し、同年3月市教委に分布調査を依頼した。それを受け4月に工事計画区域内の踏査及び試掘を行った。

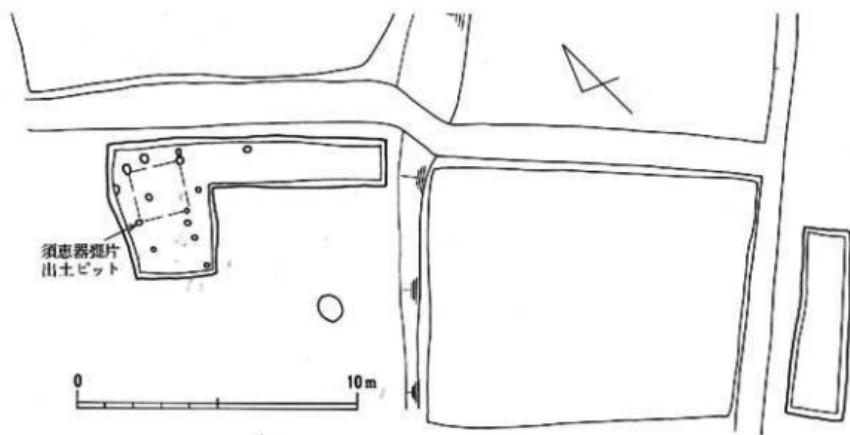
その結果、区域内には周知の新宮古墳（径25m、高さ4mの円墳）、伝宇牟加比売命御陵古墳（径20m、高さ3.5mの円墳）が再確認された他、『出雲国風土記』に記載がある「法吉神社」の旧社地を発見し、石碑と社がある平垣地が認められた。この他、「尼子時代の弾薬庫の跡」という言い伝えのある場所から、溝状造構やそれに伴う石列と柱穴と思われるピットが検出され、瓦を中心とした遺物が出土した。また、伝宇牟加比売命御陵古墳の南西方向の西向き傾斜面から径30cm程の柱穴と思われるピットが検出され、その1つのピット検出面より第3図に掲げる須恵器甕片が出土した。このことによりこの場所には掘立柱建物跡が存在した可能性が考えられる。これらの中取りについて事業者と協議した結果、新宮古墳のある地点は、開発区域から除外され、伝宇牟加比売命御陵古墳は周知の遺跡であるので古墳公園・緑地として法吉神社の旧社地と同様に現状保存され、「弾薬庫跡」及び掘立柱建物跡検出箇所については、造構面に盛土をして公園として地下保存されることになった。団地造成工事は、平成3年4月から着手され、古墳周囲は宅地計画高まで削平された。

しかしながら、平成4年9月、事業者から市教委に伝宇牟加比売命御陵古墳が一部崩れたとの報告を受け、急遽現地確認したところ古墳の北半分に亀裂が生じ、今後大雨が降れば古墳全体が崩壊する恐れのあることがわかった。事業者との現地協議の結果、擁壁等で保護しても周囲との高低差が約10mあり、周辺宅地に及ぼす影響を考えると計画通り古墳公園として保存することは困難であり、早急に調査する必要があると判断し、事業者側も調査後はその結果に基づいて古墳公園予定地を北方高台に移し、当該地は宅地にしたいとの考えを示した。

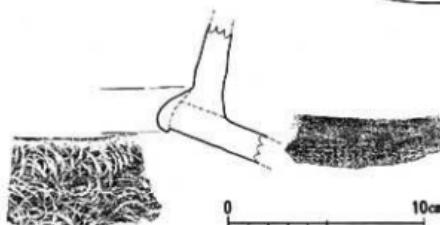
こうした経緯によって、平成4年度において、緊急の発掘調査を実施したものである。発掘調査は平成4年10月12日から11月13日までの内、23日間を要して行った。なお、古墳公園は、事業者が文化課及び街路公園課と協議した結果、別図のとおり整備される計画である。



第1図 試掘調査地点位置図



第2図 試掘調査H地点実測図



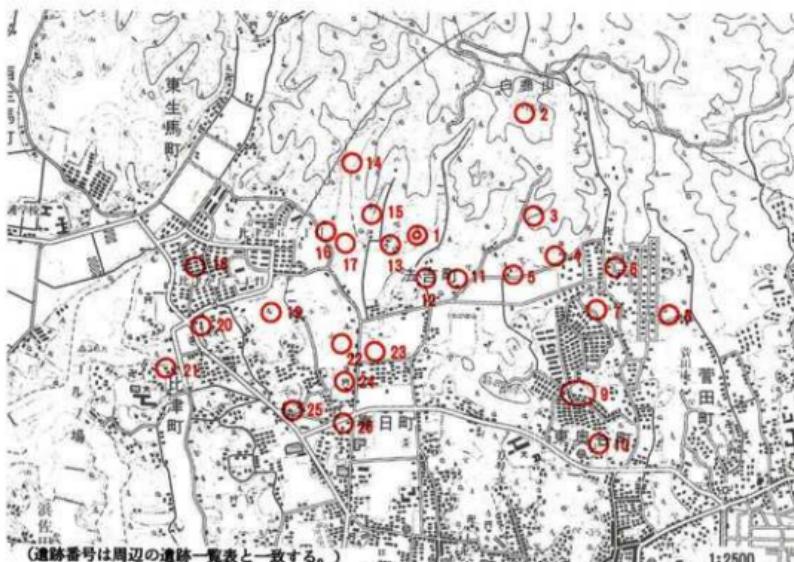
第3図 H地点ピット内出土須恵器

II 位置と歴史的環境

「伝宇牟加比売命御陵古墳」は松江市法吉町鷺谷の南西に伸びた標高約35mの低丘陵尾根部に所在する。この名称の由来は、『出雲国風土記』の島根郡法吉郷（はふきのさと）の条に「法吉郷、郡家の正西一十四里二百三十歩なり。神魂命の御子、宇武賀比売命、法吉鳥と化りて飛び度りて此の処に静まり坐しき。故、法吉と云う」という地名起源説話に基づく。

本古墳周辺には縄文時代の遺跡として、「法吉遺跡」が知られる。この遺跡は法吉神社の東約100mの水田の中にあり、昭和初年、耕地整理に伴う灌漑用水路の掘削で遺物が出土し、昭和24年の春、田地排水用の土管埋設工事の際にも土器片が出土した。川岸の土層面は表土が約80cmで、その下に灰色の砂層があり、遺物を包含している。この遺物包含層の下は、紫灰色の腐植質を多量に含む目の細い土層である。遺物は弥生式前期、中期の土器、黒曜石、石鏃、土錐、黒土BⅡ式平行の縄文式晩期末の土器片である。

古墳時代になると、山々の谷間が開発されていき、この地区周辺には多くの古墳が出現し始めた。6世紀中葉～後葉にかけては、方墳など21基から成る「月廻古墳群」がある。ここからは、箱式石棺・硯床をもつ木棺が検出され、竜虎鏡等が出土している。一辺12m、高さ2.4mの方墳



(遺跡番号は周辺の遺跡一覧表と一致する。)

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	種別	名 称	所 在 地	遺 構・遺 物
1	古 墳	伝宇牟加比売命御陵古墳	法吉町鶯谷	方墳 一辺 16 m、刀子・鉄鏃・円筒埴輪・須恵器
2	城 跡	白 髪 城 跡	法吉町	曲輪、井戸
3	古 墓	コゴメダカ山遺跡	法吉町	脇差・宋銭・明銭
4	古 墳	なつめ谷荒神古墳	法吉町なつめ谷	方墳 一辺 17 m
5	古 墳	長谷歳徳神古墳	法吉町長谷	
6	古 墳	二 反 田 古 墓	法吉町二反田	宝鏡印塔火葬基、消滅
7	古 墳	岡田菜師古墳	法吉町岡田山	方墳 一辺 12 m、横穴式石室・須恵器類・玉類、6世紀後半
8	古 墳	松ヶ峰古墳	法吉町松ヶ峰	円墳 径 36 m
9	古墳群	折廻古墳群	法吉町折廻	円墳他5基、箱式石棺等・櫛5・須恵器他、消滅
10	横穴群	ひのさん山横穴群	法吉町栗元	30穴以上・須恵器・土櫛器・3分の2以上消滅
11	古墳群	山 横 古 墳 群	法吉町山横	方墳 5基
	経塚群	山 横 経 塚 群	"	経塚 2基
12	古 墳	吉岡浜之助宅前古墳	法吉町鶯谷	方墳
13	古 墳	新 宮 古 墳	法吉町新宮谷	円墳、石室
14	散布地	田 中 谷 遺 跡	法吉町田中谷	弥生式土器・須恵器
15	古 墳	松崎金一郎所有山林古墳	法吉町鶯谷	方墳
16	古墳群	田 中 谷 古 墓	法吉町田中谷	前方後方墳 1基
17	古 墳	塚 山 古 墓	法吉町下り松	方墳、円筒埴輪
18	古墳群	月 垂 古 墓 群	比津町	方墳等21基、石棺・櫛床等・竜虎鏡他、消滅
19	散布地	久 米 遺 跡	法吉町久米	須恵器、掘立柱建物
20	横 穴	ひ ゃ く だ 横 穴	比津町	家形石棺、消滅
21	横穴群	水 酌 嶺 横 穴 群	比津町水酌嶺	半壙・須恵器・玉・金環
22	古墳群	唐 梅 古 墓 群	法吉町唐梅	方墳 4基
23	散布地	法 吉 遺 跡	法吉町	縄文式土器・弥生式土器・土師器片
24	経 塚	石 在 経 塚	法吉町	一字・石経・土壙
25	横穴群	比 津 が 嶺 横 穴 群	比津町	須恵器、消滅
26	散布地	中 代 遺 跡	春日町	古式土師器(壺・甕) 黒曜製石鏃、消滅

である「岡田薬師古墳」は石室の規模が全長3.3m以上、奥壁部の幅1.1m、高さ1.04mで側壁の中央付近に側壁を大きく持ち送って羨道と玄室の区分を行うという非常に特殊な形態の横穴石室を有する。石室内出土須恵器と盛土内の須恵器が山陰須恵器編年Ⅲ期にあたることから古墳の築造はおよそ6世紀後半と考えられる。副葬品には須恵器類、玉類があり、盛土内出土須恵器が盛りながら順次置かれたり、石室内出土須恵器より若干新しいことから墳丘を築成する最終段階でなんらかの祭祀行為が行われたものと考えられる。他の方墳では、全長24mの前方後方墳である「田中谷古墳」、円筒埴輪が残っている「塚山古墳」、一辺17mの「なつめ谷荒神古墳」、他「山根古墳群」、「松崎金一郎山林古墳」、「吉岡兵之助宅前古墳」等がある。円墳では、直径25m、高さ4mで石室の石材らしきものが残存している「新宮古墳」がある。

古墳時代以降の遺跡としては、経塚が2基集中している「山根経塚」、一字一石経が残っている「石在経塚」がある。古墳では、「コゴメダカ山遺跡」で筋差1口、宋錢、明錢が遺物として残っている。

戦国時代に入ると「白髮城跡」と「新山城跡」がある。白髮城は『雲陽軍実記』などに見られる「出雲十旗」の筆頭に置かれており、中腹には井戸跡が残っている。新山城は『雲陽誌』によると毛利氏が白髮城攻めを目的として向城としてつくり、後に尼子勝久軍の手にわたるが勝久没後再び毛利氏の手に戻ることとなった。「白髮城跡」「新山城跡」は当時の尼子・毛利の決戦の様子を忍ばせる。室町後半期から安土桃山期にかけての古墳「二反田古墳」は石敷基壇の遺構を有し、そこに宝蔵印塔の石塔が散乱していた。今回の「伝宇牟加比光命御陵古墳」は、前述した通り、『出雲國風土記』に書かれている「法吉」の地名起源説話にちなんで名づけられたもので、法吉地区の中では中心的古墳として周囲の歴史を考える上で貴重な資料になるものと思われる。

〈参考文献〉

1. 新人物往来社 「日本城郭大系14島根・鳥取・山口」 1980年
2. 島根県教育委員会 「岡田薬師古墳」 1986年
3. 松江市教育委員会 「二反田古墳」 1987年
4. 山本 清 「山陰の須恵器」「山陰古墳文化の研究」 1971年
5. 関崎雄二郎 「松江市法吉・長谷窯跡推定地について」(松江考古学談話会『松江考古第7号』 1989年)
6. 内田 映 「法吉村誌」 1988年

III. 調査の概要

伝字牟加比売命御陵古墳は松江市法吉町鶯谷の南西に伸びた標高約35mの低丘陵尾根部に所在する。

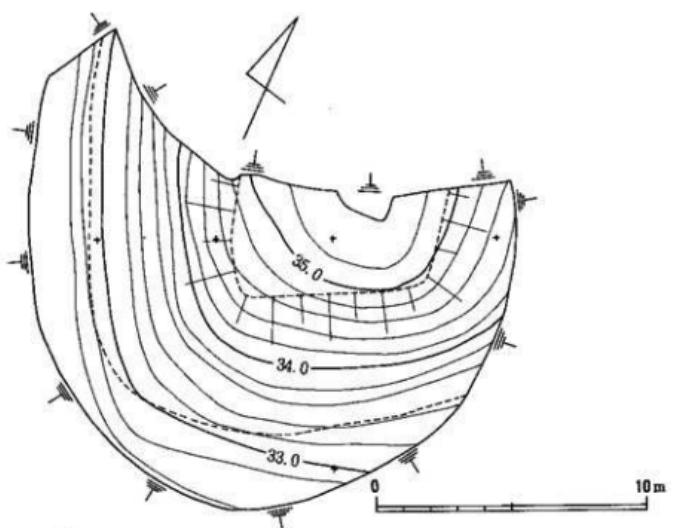
本古墳が文献に登場するのは『島根県史』(大正13年刊)が最初である。第3巻第3章の島根県内存在古墳郡別種別一覧中、八束郡の項には「土器等」があり、「字牟迦比姫女御陵ト言傳フ」とある。この字牟迦比姫については『出雲國風土記』の島根郡法吉郷の条に「神魂命の御子、字武賀比売命、法吉鳥と化りて飛び度りて、此の処に静まり坐しき。故、法吉と云ふ。」^(註1)とあり、古来より法吉の地名の由来の神として伝えられてきている。

山本清氏（現島根大学名誉教授）が昭和18年10月に現地踏査された際の記録によると、直径20m、高さ約2mの円墳であり、中央部に発掘形跡があったとのことである。

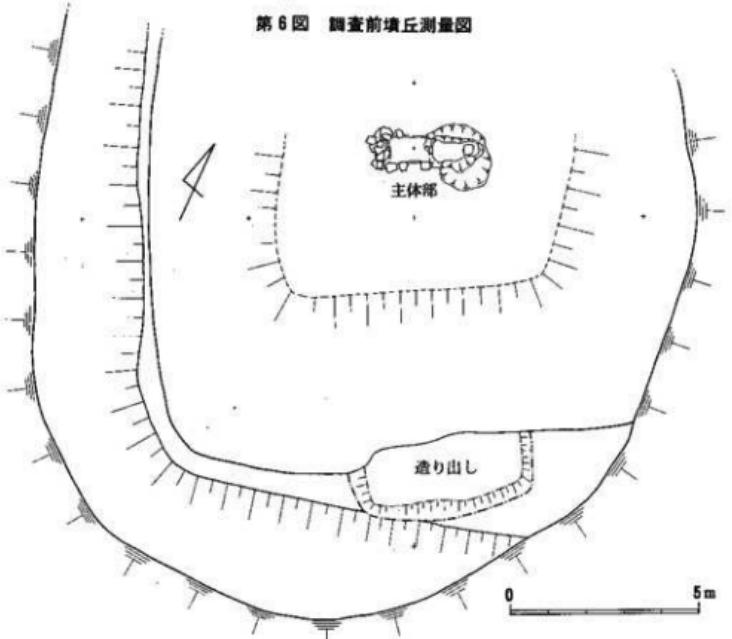
調査前の古墳の現状は、保存予定の直径20m程の範囲を残して周囲が切土され、墳丘の北西部の崩壊部分に補強用の土盛りがなされていた。表土は公園の芝生を貼るために削り取られており、墳頂と考えられる辺りには埴輪や須恵器の破片が散乱していた。



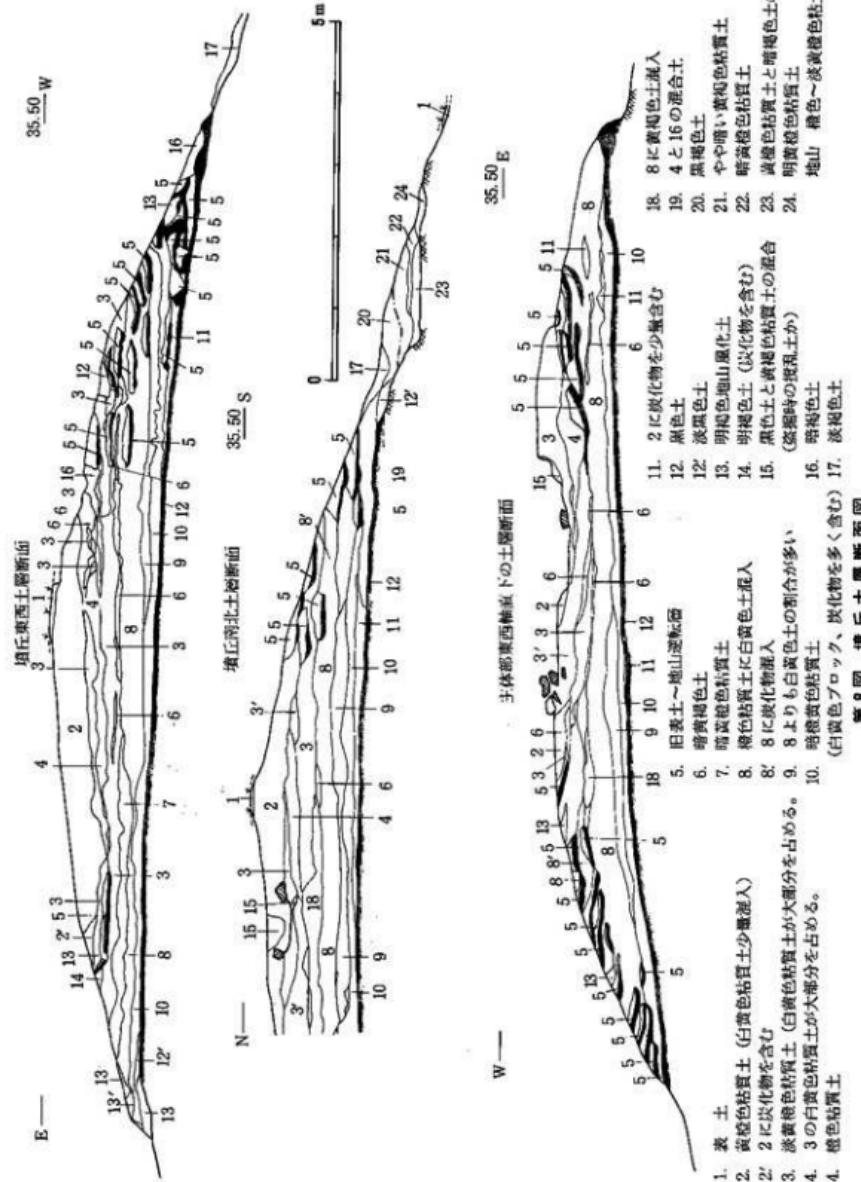
第5図 伝字牟加比売命御陵古墳周辺の地形測量図



第6図 調査前填丘測量図



第7図 調査成果図



第8図 境丘土層断面図

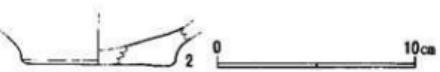
調査前測量の結果では、円墳ではなく一辺約18m、高さ約2mの方墳と考えられ、中央付近には直径2mほどの盗掘坑があいていた（第6図）。



1. 墳丘の規模・形態（第7図）

調査の結果、盛土が相当流失していることが判り、築造当時は一辺16

mの方墳であり、高さは最も比高差のある南側の墳裾で現存2.4mあるが、当初はもっと高かったものと思われる。南側の墳裾には幅5m、長さ2mの造り出しが付設されていた。従来この古墳が円墳とされてきたのは、この造り出し上や各辺の裾部に多量の土砂が堆積した結果、そのように見えたものであろう。



第7図 墳丘の規模・形態

2. 墳丘基盤と墳丘の盛土（第8図）

南北に緩やかに傾斜する旧表土面を焼き払った後、旧表土からその直下の地山にかけて台状に削り出して墳丘基盤としている。^(註2)基盤上は炭化物と灰の混じった黒色土であった。

盛土は墳丘中心部では黄褐色～橙褐色の粘質土を主体にして積んでいるが、墳丘の外側寄りでは黒色の旧表土から地山にかけてのブロック状の土を上下逆転して使用し、粘質土と互層状に積み上げているのが注目される。焼き払って得た黒色土と粘質土を交互に積む方法を取っているのは墳丘の南西部において顕著であり、^(註3)南西に傾斜した基盤上に築造されていることと考え合わせると、墳丘の保持と関係のある手法ではないかと考えられる。

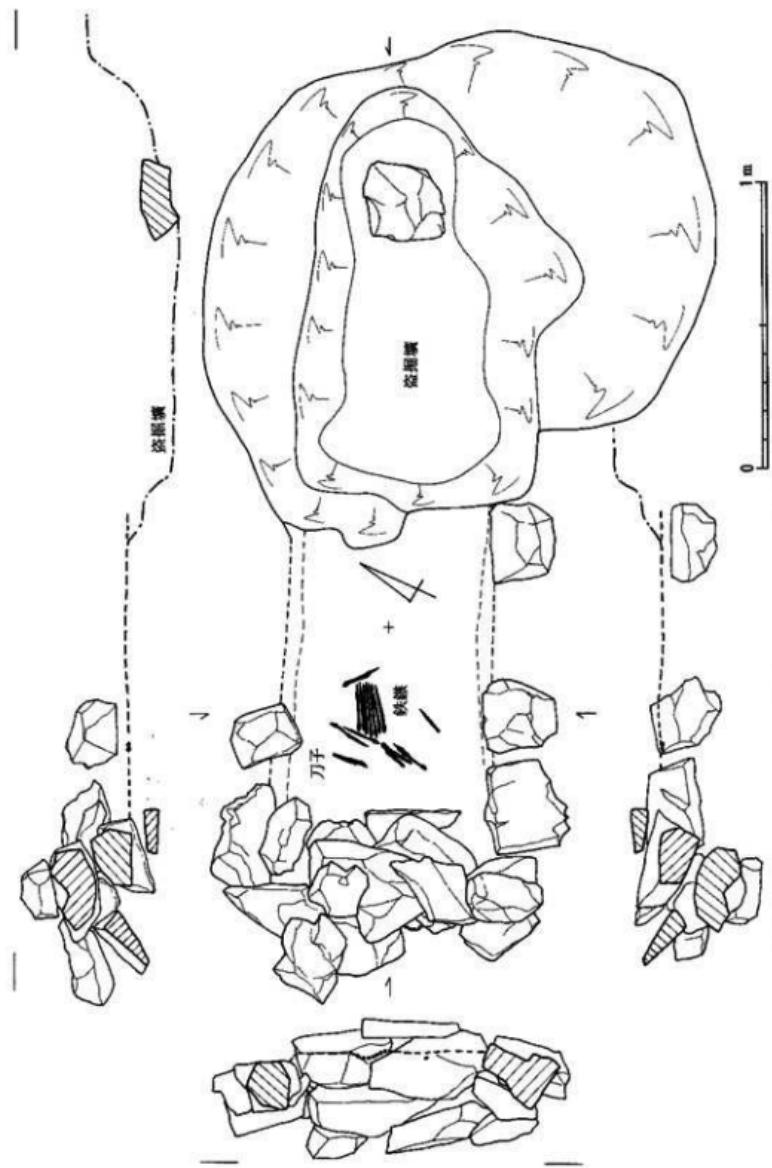
また、基盤上及び盛土中の祭祀の痕跡の有無について精査したが、築造時のものは遺構、遺物ともに認められなかった。

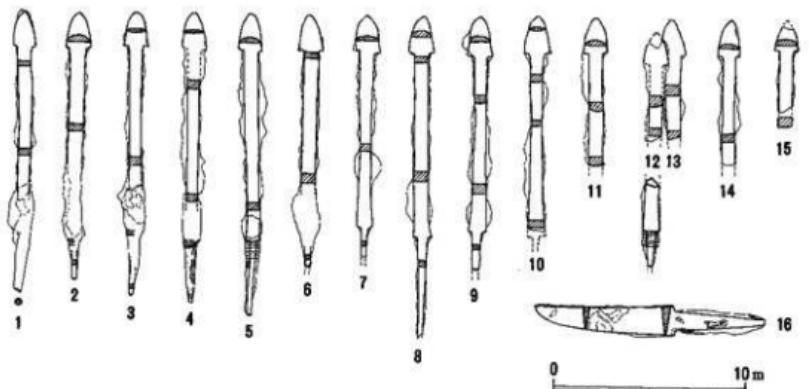
盛土中に含まれていた時期の違う遺物として、弥生土器の底部と古墳時代前期の甕の口縁部がある（第9図）。

3. 内部主体（第10図）

埋葬施設はおそらく木棺であったと思われるが、現存しているのは周りを囲った石組みの一部である。石囲い木棺墓とも言うべきか。石組みの東側部分は盗掘を受けていたが、長軸をほぼ東西に取り、内部の幅は65cm、長さは残存長1mあり、盗掘された部分を含めて推定すると2m以上はあったと考えられる。使用されているのは20～40cm大の石である。

第10圖 主體部測圖





第11図 主体部内出土遺物

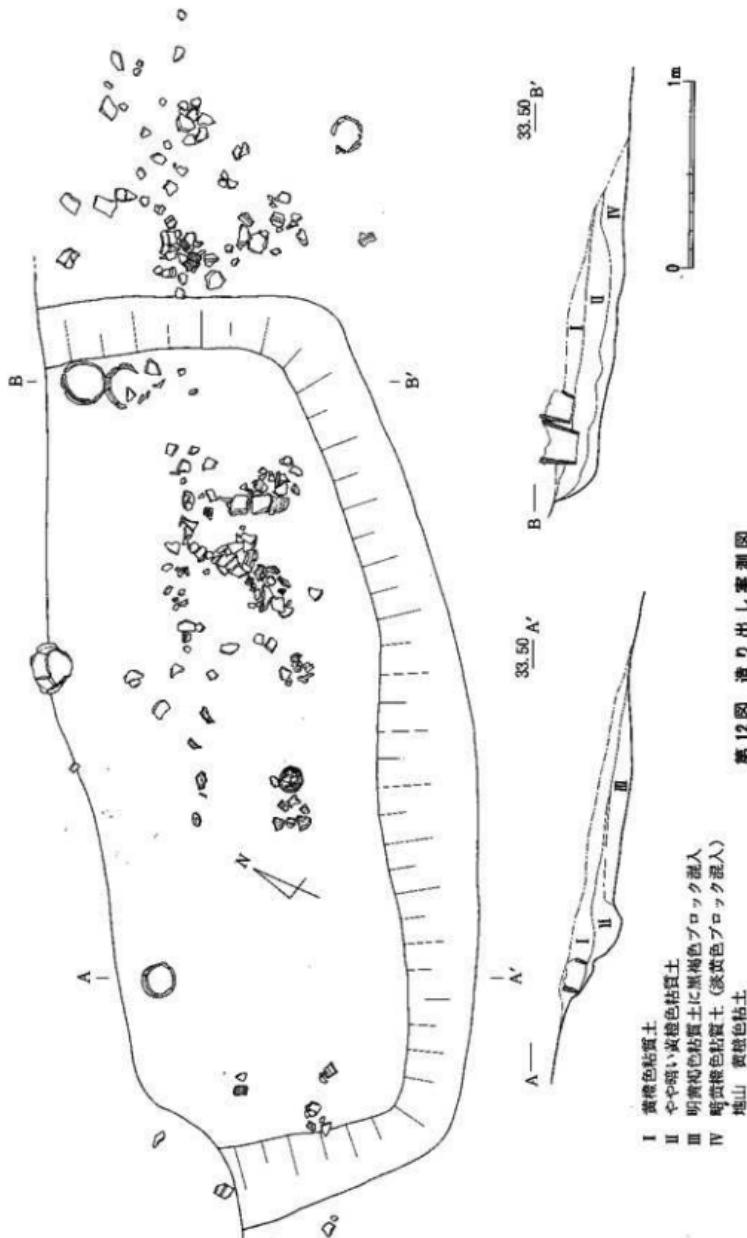
小口部分には多くの石が使われて4段に積まれており、高さが50cm近くあるが、側辺は小口の2段目の石と同じレベルに1段だけ並べられている。盗掘は石突いのところまでは及んでいないと判断されたので、簡略に囲ってそれでよしとしたのであろう。石組みは基盤上に1m余り盛土をした時点で始められている。

石突い内部からは鉄製刀子1口、鐵鎌15本が発見された。出土状況を見ると、鐵鎌の先端の方向が一定していないものが数本あり、80cmにもなると思われる矢柄が装着されたままの状態では石突いの外にはみ出す長さになるので、床面に置かれていたとは考え難い。木棺の上に置かれたものが、棺の腐朽と土圧により徐々に落ち込んだものではないかと考えられる。

出土遺物（第11図）

1～15はすべて短い鎌身、長い頭、茎からなる長頭鎌である。鎌身は柳葉形で直角の間を持ち、軽くくびれるものと、くびれず真っすぐ間に至るものがある。断面形は片丸のものが多い。頭の断面形は長方形、範囲は形のわかる個体からすると撥形に軽く広がるものである。全長がわかるものは3～5・8などで14.8～16.8cmを測る。鎌身の長さは1.8cm前後、幅は間の近くで1.2cmある。茎には木質が残りその上から樹皮を巻いたものが數点あり矢柄の装着法がわかる。このような形式の長頭鎌は中期中頃から出現すると考えられており、後期にも通有のものである。^(註5)

16は鉄製の刀子である。全長12.0cm、刀身長7.3cm、元幅1.6cm、茎長4.7cmを測る。棟線は直線に近く、関部は両関となっている。須恵器出現以降に見られるもので、^(註6)松江市薄井原古墳出土の刀子によく似ている。



第12図 造り出し実測図

4. 外部施設

1) 造り出し（第12図）

南側の墳壙に接した東西5m×南北2m程の範囲に平均30cm程度の盛土をして、長方形の造り出しを設けている。造り出しには3本の円筒埴輪が底部を埋めて立てられており、造出しおの上面からはたくさんの須恵器、丹塗りの土師器高杯、埴輪片などが出土した。

① 造り出しの築成（第12図）

墳丘基盤を台状に削り出す際、同時に南側墳壙部分に平坦面を広く取っており、当初から計画されたものだったことがわかる。平坦に削り出された地山面に黄褐色系の粘質土や黄褐色粘質土と黒褐色土との混合土を積み上げて造っており、墳壙に接する残りの良い部分では約40cmの高さがあった。先端部が低くなっているのは盛土が流失したためであり、当初は水平に造られていたものと思われる。

② 遺物の出土状況（第13図）

埴輪は原位置のものが3本あり、1本は造り出しの西端近くに、もう2本は東端に南北に並んでおり、基底部が5~10cm埋められていた。

須恵器は杯蓋が少なくとも10個体、杯身4個体、甌1個体、無蓋高杯1個体、有蓋高杯4個体、高杯蓋3個体がある。蓋杯類（完形品を含む）は中央部からやや西よりにかけて多く出土し、高杯類とその蓋、甌などは東よりから出土している。丹塗りの土師器高杯は須恵器蓋杯類の近辺に見られた。

③ 出土遺物

須恵器（第14・15図）

1~8は杯蓋である。これらは形も大きさも変化に富むものであるが、口唇部がはっきりした段を持つか整刃状に作られるという古手の作りの共通性を持っている。1~5は口縁部と天井部の境に稜をもつもので、1が最も鋭く突出し、5が最も鈍くて沈線に近い。これは口縁部の開き方と関係するものである。口径は1（完形品）が最小で13.4cm、3が最大で14.9cmを測る。6,7は稜にあたる部分が沈線のもので、口縁部は内湾気味となっている。口径は13.2cmと13.6cmを測る。8は他のものとはやや趣を異にしており、口径が15.7cmと蓋の中で最大であるにもかかわらず器高は4.1cmと最小で、天井部が広く作られ、全体に偏平な印象を受ける。稜にあたる部分には沈線が巡り、口縁部はやや外反しつつ端部に至るものである。

9~13は杯身である。全形の復元できる個体はない。9~11はたちあがりを欠くもので、受部径は14.1cm~14.4cmを測る。9は薄手で体部が非常に浅く、10, 11は厚手でやや深い。12は口縁部の小片である。たちあがりは1.9cmと高く直立し、口唇部内面には段を意識したような痕跡が



第13図 造り出し遺物出土状況

黒色 須恵器
 赤色 土師器
 茶色 円筒埴輪
 遺物実測図のスケール
 1 : 4

114

見られる。13は受部付近の小片で、受部は水平方向に伸びている。

14は縫の口縁部である。口径12.2cm。縫基部は太く、内面に絞り目はない。口縁部内面は凹んで小さな段が作られている。外面には、波状文が口縁部にも縫部にも施されている。

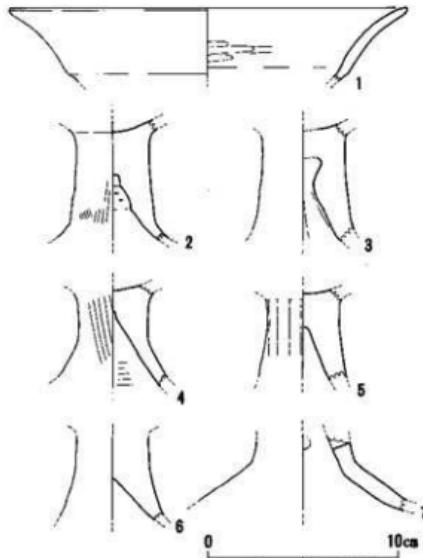
15は無蓋高杯である。外面にはくっきりした沈線が2条巡り、その下に波状文が施されている。口縁部は丸い。

19~21は高杯の蓋である。いずれも口縁部に段をもち、口縁部と天井部の境に沈線の巡るものである。19は平たい天井部の真ん中につまみの痕跡が残っている。口径15.4cmを測る。これらの蓋は胎土、焼成、色調、ロクロナデによる器壁の凹凸など、22~26の有蓋高杯と非常に良く似ており、これらと組み合うものと考えられる。

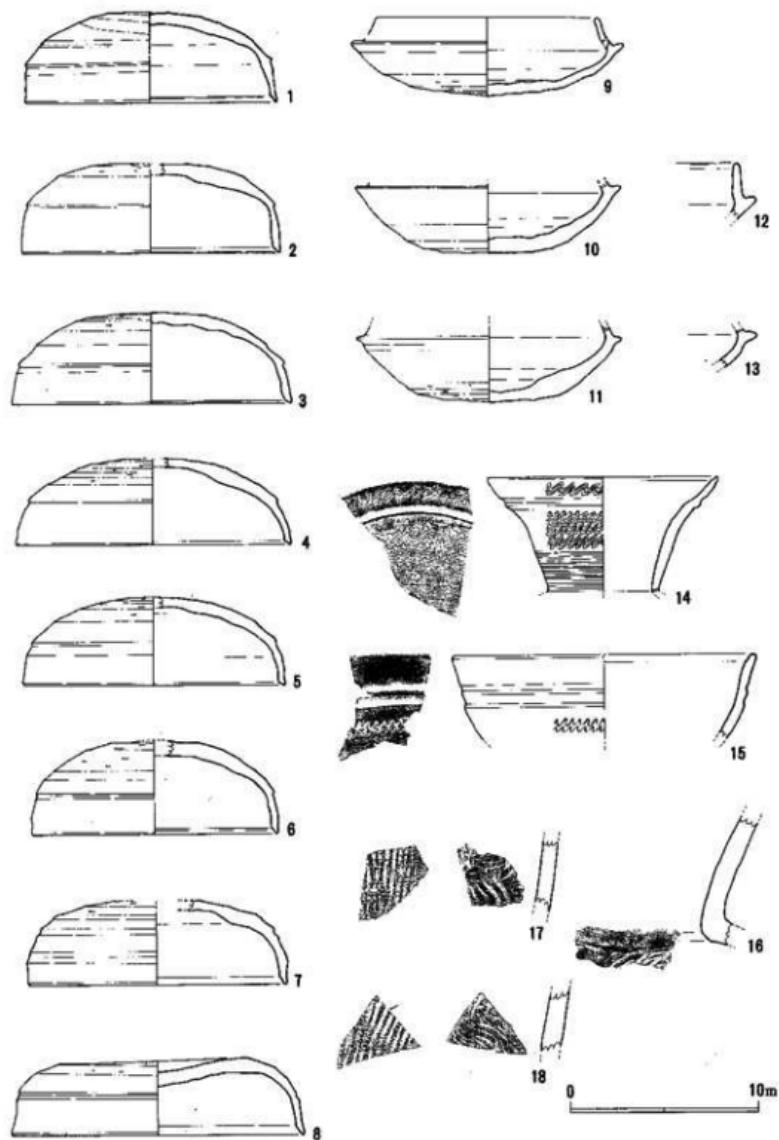
22~26は長脚の有蓋高杯である。いずれも脚筒部には長方形の透かしが3方にあけられ、段とその下の沈線、沈線のみ、稜線などで区切られた脚裾部には上下に振幅の激しい波状文が施されている。段で区切られるものは22と25、沈線によるものは24、稜線によるものは26である。波状文はクシ状工具によるもの(22, 24)とヘラ状工具によるもの(25, 26)がある。脚端部は踏ん張った形で終わっている。杯部は全形の残る22で見ると口径13.5cm、受部径16.1cmと大形のものである。口縁部のたちあがりは内傾後上向きに伸び、端部はやや丸くなっている。内面底部には同心円の押当具痕が全個体に見られ、底部外面には同心円状の溝をもつもの(25)もある。全体に薄手の作りでロクロナデによる器壁の凹凸が著しい。胎土中には1~3mmの大粒砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は灰青色~黒灰色を呈している。このような形態の有蓋高杯は当地方では類例のないものである。

土師器(第16図)

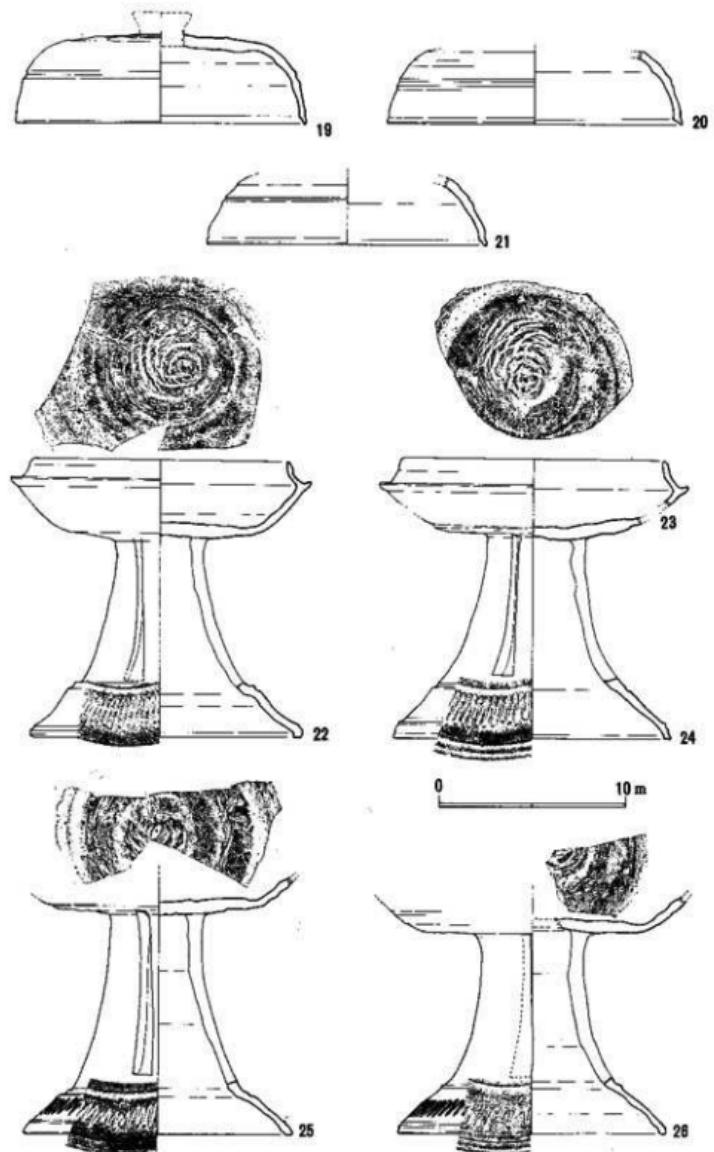
すべて丹塗りの高杯で、6個体確認される。1は外反して伸びる口縁部から底部にかけての破片で、外面にわずかに段を残すものである。外面はヨコナデ、内面はヘラミガキが施され、両面とも赤色である。2~7は脚部であるが、端部まで残っているものはない。円筒状の筒部



第14図 造り出し出土土師器実測図



第 15 図 造り出し出土須恵器実測図

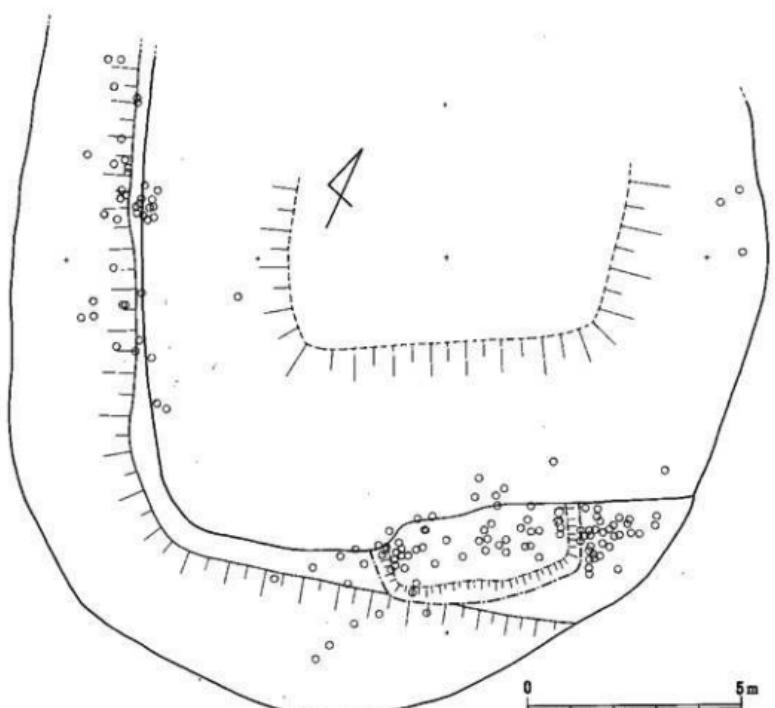


第16図 造り出し出土須恵器実測図
16~18は墳丘上より出土

から屈曲して大きく開くものと、自然に広がって行くものがあるようだ。7は前者のタイプで、筒部に円形の透かし孔があいている。坏部外面の段や坏部と脚部の接着法などからするとこれら(註7)の土師器は須恵器のI～II期頃に特徴的なものと言えよう。

埴輪(第18図1～3)

いずれも底部から胸部にかけて残存している。上方に向かってわずかに開いていく形で、タガはしっかりした台形ではないけれども突出しており、透かしは円形か梢円形のものである。底部は再調整されて断面U字形となっている。焼きは土師質のもので、黒斑はない。1は底径16.0cm、第1段タガまでの高さ9.0cmを測る。基底部外面はナナメハケ後、下半に板オサエが行われ、内面は上半がヨコハケ、下半が強い指ナデと指オサエによって調整される。2は底径15.6cm、第1段タガまでの高さ9cm余りである。外面は摩滅して調整不明、内面は指ナデが行われる。3は逆時計回りの巻き上げで成形される。底径17.0cm、第1段タガまでの高さ13.0～16.0cmを測る。基



第17図 円筒埴輪片出土分布図

底部外面はタテハケ、内面はナナメハケで再調整され、底面はナデが行われる。胴部外面には2次調整のヨコハケが施され、内面にはナナメやヨコの指ナデが施される。

2) 造り出し部以外の円筒埴輪

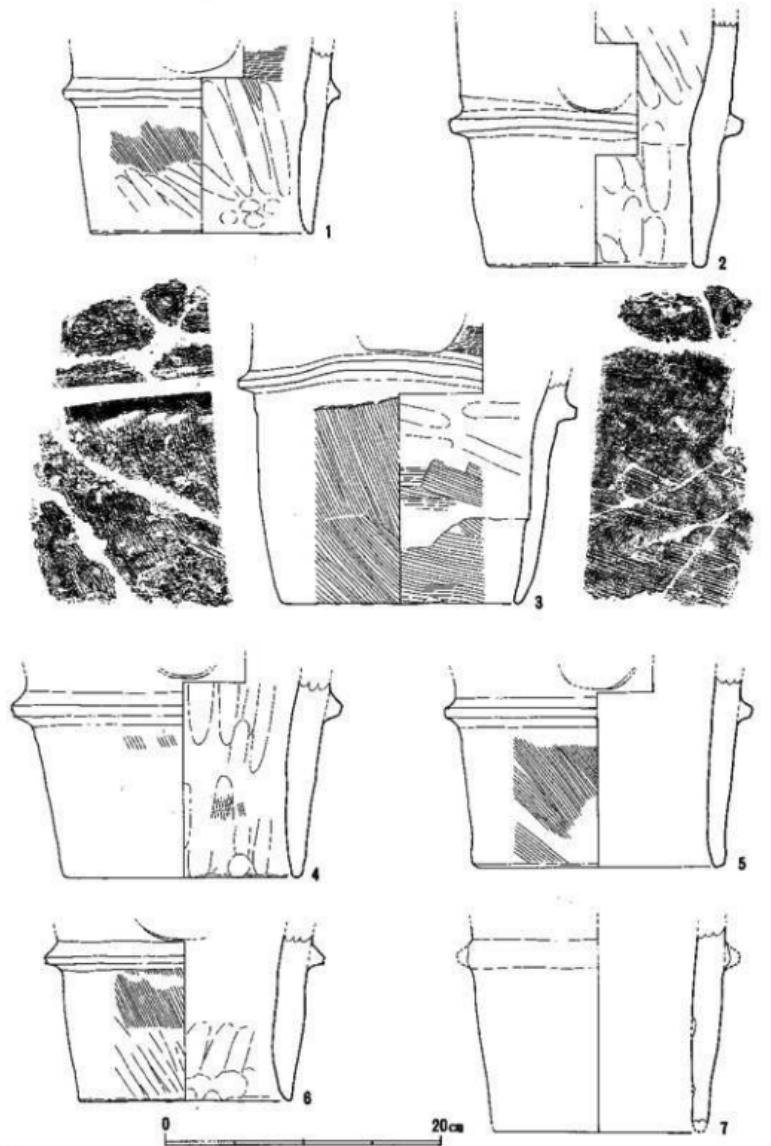
① 出土状況（第17図）

造り出しに立てられていたもの以外に、原位置とは考えられない埴輪が多数の破片となって墳丘や各墳壙から出土し、西側墳壙の破片と南側墳壙の破片が接合したものもある。また、造り出し直上の須恵器などを含んだ堆積土よりもさらに上層の墳丘盛土流れ込み層からは倒立状態の埴輪が発見された（第12図）。個体識別作業の結果、少なくとも10個体はあることが確認できる。これらのことから考えると、円筒埴輪は墳頂部にも多数立て巡らされていたことが推量されるのである。

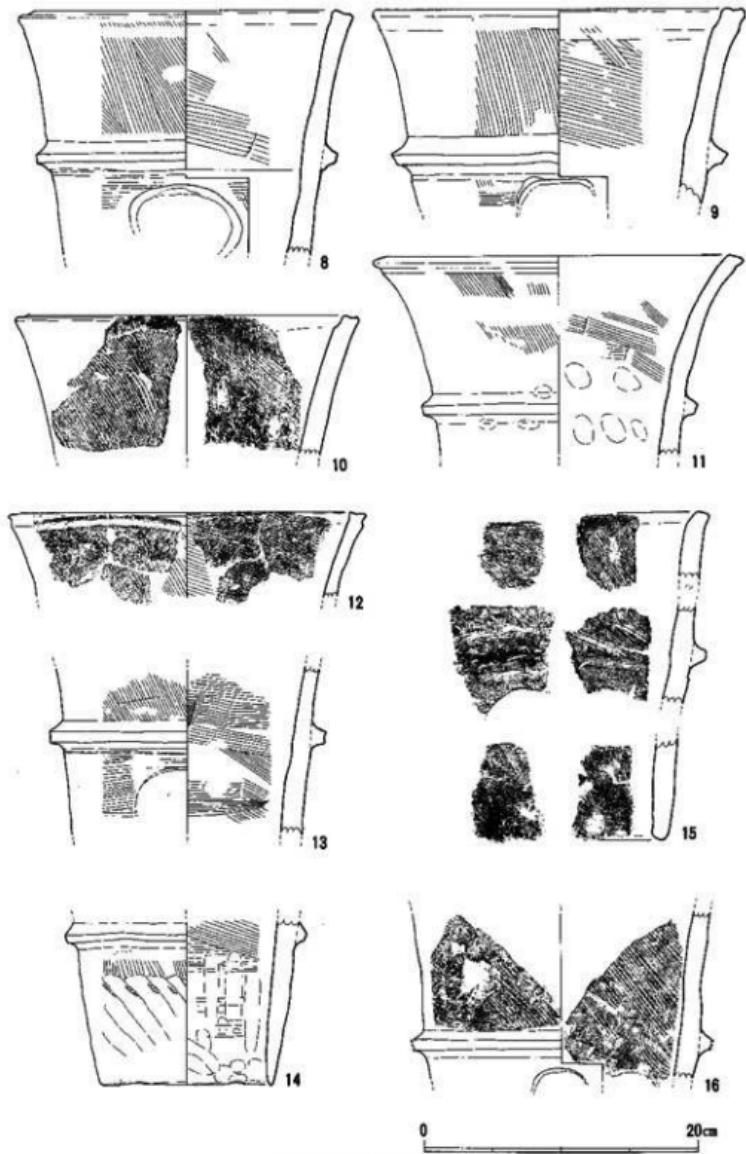
② 円筒埴輪（第18・19図）

基底部から胴部にかけて残っているものについては、造り出しに立てられていた埴輪と基本的に変わりはない。すなわち、上方に向かってわずかに開いて行く形状を示し、第1段タガはしっかりとした台形ではないけれども突出しており、透かしは円形又は梢円形である。底部は再調整され、断面U字形のものとV字形のものがある。焼成は土師質のものと、表面は土師質であるが断面は還元状態を示すものがある。4は底径16.8cm、第1段タガまでの高さ11.0cmを測る。外面は摩滅しているが一部タテハケが残り、内面はタテハケ後、指ナデと指オサエが行われる。5は底径18.0cm、第1段タガまでの高さ10.0cmを測り、外表面はナナメハケが施され、内面は摩滅しているが、ナデかもしれない。底端部はやや外に反っている。6は底径15.2cm、第1段タガまでの高さ8.2cmを測る。外面はタテハケ後、下半に板オサエが、内面は指ナデと指オサエが行われる。7は軟質の焼きのもので外面は摩滅しているが板オサエのようであり、内面は上半指ナデ、下半指オサエが行われる。

口縁部から胴部にかけて残っているものはすべて逆「ハ」の字形に聞く形である。タガ形は台状又はM字状を呈し、透かしは円形又は梢円形である。調整は口縁部外面がタテハケ、内面がナナメハケ、胴部外面はタテハケ後2次調整のヨコハケが施されるものと、タテハケのみのものがある。8は推定口径23.9cm、口縁部高9.5cmを測り、胴部外面に2次調整のヨコハケが施される。9は推定口径26.8cm、口縁部高9.2cmを測り、胴部外面に2次調整のヨコハケが施される。8と9は胎土や色調、調整などからみると同一個体の可能性がある。10は推定口径24.6cmを測り、内外面ともタテからナナメのハケメが施される。11は口径26.6cm、口縁部高9.8cmを測り、外面はタテハケ、内面はナナメハケにより調整される。表面は赤橙色、断面は青灰色である。12、13、14は同一個体の可能性のあるもの



第18図 円筒埴輪実測図



第19図 円筒埴輪実測図

である。口径25.6cm、推定底径12.4cmを測る。外面の調整はタテハケ、内面の調整はナナメからヨコのハケメが施され、胴部外面はヨコハケで2次調整される。底部は再調整され、外面は板オサエ、内面は指ナデと指オサエが行われる。15は口縁部、胴部、底部の小片で、接合はしないが同一個体の可能性がある。底部は外面が板オサエと指ナデ、内面が指ナデと指オサエによって再調整されている。出土品中、胴部に2次調整のヨコハケを持たない唯一の個体である。16は口縁部端を欠く胴部までの破片で内外面ハケメが施されている。

- 註1. 加藤義成『出雲國風土記参究』昭和32年による。
2. 三浦 清氏(島根大学教育学部教授)の御教示による。
3. 出雲市の今市大念寺古墳(『史跡今市大念寺古墳保存修理事業報告書』1988年 出雲市教育委員会)では、墳丘の盛土に使われた黒色粘砂土や暗灰色粘質土が山土を木と共に焼き海水またはニガリを混ぜて練りあげてつくられており、水を通しにくい性質をもつように工夫されている。そしてその土を墳丘外形を形造る第2次墳丘に粘質土と互層状に盛り、さらに墳丘の表面にはこの土が出るようにして造られている。本古墳の場合は焼かれた旧表土から地山の土がわざわざブロック状に削り取られて上下逆に使われており、大念寺古墳のように入念な造りのものではないが、墳丘を崩れにくくするための意識的な手法と考えてよいのではないだろうか。
4. 松江市上乃木町の二子塚古墳(『松江圏都市計画事業未木地区区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1983年 松江市教育委員会)は一辺約18m、高さ2m以上の方墳である。主体部は盛土上層部にあったと見られるが不明である。周濠中より円筒埴輪、須恵器环片、器台片内面ナデ消しの甕片などが出土し、Ⅱ期とⅢ期の境目に位置付けられている。基盤上には土師器の浅い盤と甕が並べて置かれており、甕の中にはペンガラが入っていた。これは古墳築成直前の地鎮祭のようなお祭りに供獻されたものと考えられている。
また、松江市吉田町の岡田薬師古墳(『岡田薬師古墳』島根県教育委員会 1986年)は特異な形態の横穴式石室を有する後期古墳であるが、墳丘完成の最終段階で須恵器の蓋3組が発見されており、盛土中の祭祀が想定されている。
5. 原喜久子「島根県における古墳時代の鉄鎌について」平成4年度島根考古学会例会発表要旨
6. 三宅博士「山陰地方出土刀子に関する観察」(『山陰考古学の諸問題』山本 清先生喜寿記念論集刊行会 昭和61年)
7. 山本 清「山陰の土師器」(『山陰文化研究紀要6号』昭和40年)

IV. 考察

1. 遺構の検討

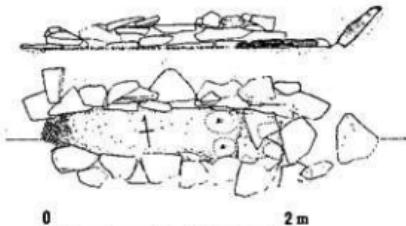
1) 内部主体について

木棺を置いて周りを石で囲うという本古墳の埋葬方法に似た県内の古墳の調査例としては、
^(註1)多伎町の経塚山古墳と島根大学敷地の菅田ヶ丘古墳がある。
^(註2)

経塚山古墳（第20図）は小丘陵の緩傾斜地に位置する東西約6m、南北約5.5m、高さ約1mの小形の方墳である。埴輪や葺石はない。主体部は「両側に扁平な割石を僅かに積み、床面に細砾を敷く一種の砾部とも称すべきもの」であって、内部には長さ約2.5mの木棺があつたらしいとされている。頭部の幅は約40cm、足部の端の幅は約40cmある。枕石のある東側には扁平な石が斜めに立ち、側石は北側は高い所では約30cmの高さがあるが、南側では最高点で高さ12cmであり、他は扁平な割石を1枚ずつ並べただけのものである。報告によれば「これは余りにも粗造であつて、あたかも小形の堅穴式石室が破壊されたもののような印象を与えるが、発掘の所見としては原状のままであることが明瞭であった。」と述べられている。副葬品は玉類のみがあり、それらの時期からしてこの古墳の時期は中期の末葉までは下らないものとしている。

また菅田ヶ丘古墳は島根大学敷地内の丘の頂部に存在した残存部の軸長約25m、高さ約3.5mの前方後方墳である。葺石ではなく、墳頂に円筒埴輪を用いていた。主体部は「一種の平床をもつ砾部とも称すべきもので、長さ約2.3m、幅約80cmの床面をもち、床面は長さ40cm程度の平たい野石をやや粗く敷き、東西両側に粗雑な堅穴式石室の壁面に似て、20~30cm程度の石に小石を交ぜて高さ30cm内外に無造作に積んだもので、頭の方（北方）にも砾群を

配するものである。平らな床面は北端が南端より約15cm高く、北に頭を置いたことが知られる。発掘の際、全体としては特に後世の攪乱の形跡は認められず、ほぼ原形を保つものと観察された。」とあり、組み合わせの木棺の存在が推測されている。副葬品は玉類18点だけがあり、それらの玉は後期古墳出土品と共通点が多いが、須恵器など土器を全く副葬していないことから、「内部に土器を副



第20図 多伎経塚山古墳
(註1文献より転載)

葬する風の一般化する以前に属するもの」とし、その時期を「大まかに中期後半」としている。

以上の2例を見ると、本古墳の主体部がこれらと最も違う点は床面に石も礫もないことであり、石囲い木棺墓と名付けた所以である。しかし、その他の点、すなわち破壊された竪穴式石室を思わせるような簡略な石組みをもつにもかかわらず原状を保つものであると考えられること、盛土の上層に設置されていること、内部に土器が副葬されていないこと等、非常に似通ったものであることがわかる。従って本古墳の主体部はこれだけから見れば中期的な様相の色濃いものといえよう。

^(註3) 他に松江市古曾志大谷1号墳の前方部の主体部は、石の大きさ、舟形木棺の底部を想像させる石の囲み方など大分様相は異なっているが、浅い位置に作られていることや土器を副葬していないこと、造り出しで祭祀を行っていることなど本古墳の埋葬方法をさかのぼった時期のものとして示唆的な例である。

2) 造り出しについて

本古墳の造り出しは南側の墳裾に接した東西5m、南北2mの範囲に簡略に盛土をして造られていた。そして埴輪列と言うほどの本数ではないが、円筒埴輪が東端に2本、西端近くに1本立てられ、土師器高坏（丹塗り）や須恵器高坏、蓋坏、などが出土している。土器類は墳裾出土の須恵器の甕3片を除くと造り出し以外からは出土していない。この造り出しあは前記の土器類を供獻して埋葬に伴う墓前祭祀をおこなった場所と考えられるのである。

^(註4) 県下における造り出しの調査例には松江市の石屋古墳と古曾志大谷1号墳がある。

石屋古墳は一辺40m、高さ7.5mの方墳で、造出部は南北の各辺に設置されている。北側の造出部は推定復元長9.6m、縦幅5.4~5.6mの長方形のもので、高さは約1mである。中央平坦部からは多数の形象埴輪片に混じって、須恵器の壺、器台の破片、土師器の高坏、丸底壺、の破片などが散布し、これらの両側には円筒埴輪列が並んでいた。一方南側の造出部は、測量時から10m程の長さにわたって1m近く高くなっていることがわかっており、トレント調査の結果では、平坦面があるだけであった。前者については何らかの墓前祭祀が行われ、後者については歌舞音曲に類した行事が行われた場所と推測されている。

古曾志大谷1号墳は全長45.7mの前方後方墳で、造り出しは前方部の先端に築造当初から付設されている。幅は前方部と接する部分で6.6m、先端に向かって広がり端部で8m前後、長さは5.4m~5.7m、高さは接続部で35cmを測り、現在は端部に向かって下がっているが当初は水平だったであろうと考えられている。造り出し上の両側辺には円筒埴輪列があり、造り出し上面や南東裾外からは土師器高坏（丹塗り）、須恵器の高坏、器台、小形壺、壺、腹、

子持ち壺等多数の土器が出土している。須恵器は破碎された可能性があり、丹塗り高杯が大量にあることなどから、いわゆる祭壇の機能を果たしていたものと考えられている。

以上の2例は、時期は違うがそれぞれの地域において大きな権力を握っていた首長クラスの墓であり、古墳自体の規模が大きいため、造り出しも大きな規模のものとなっている。造り出し上に立てられた円筒埴輪列もしっかりしたものであり、くらべて本古墳例は簡略なものとの感は否めない。造り出し上の出土品を見ると、石屋古墳には数々の形象埴輪があり、大谷1号墳にはないが、土器類は両者で共通するものが多いようである。

一方本古墳の土器類を見ると、両者と共通する器種に丹塗りの土師器高杯、須恵器高杯類（ただしこれらのうち有蓋高杯は当地方では類例のないものである）、埴などがあるが、器台や壺ではなく、両者にない蓋杯がここにはある。これらのこととはなにを意味するのであろうか。出土した須恵器や円筒埴輪から見れば本古墳の築造は古曾志大谷1号墳より明らかに下るものであり、祭祀の内容が変化したためかと考えられるが、有蓋高杯が撤入品であるとすればそれらとともに他地方の祭祀が移入された可能性も否定できない。

- 註1. 山本 清 「小規模古墳について」（『島根大学論集 13号』 昭和39年）
2. 山本 清 「島根大学敷地菅田ヶ丘古墳について」（『山陰文化研究紀要 第17号』 昭和52年）
3. 『古曾志遺跡群発掘調査報告書 一朝日ヶ丘団地造成工事に伴う発掘調査一』 1989年 島根県教育委員会
4. 『史跡石屋古墳』 昭和60年 松江市教育委員会

2. 遺物の検討

1) 須恵器について

蓋杯、埴、無蓋高杯、有蓋高杯があるが、このうち有蓋高杯は当地方では類例のないものであり、別に検討する。

① 蓋杯、埴、無蓋高杯について

杯蓋は8点ある。口径は13.2cm～15.7cmを測り、最小のものと最大のものとでは2.5cmもの開きがある。器高は4.1～5.0cmの範囲にある。形態上の特徴を上げてみると、すべてに共通するのは口唇に段をもつか斬刃状に作ることである。天井部と口縁部の境はあまり鋭くないかもしくは鈍い稜をなすものが5点、沈線を廻らすものが3点ある。口縁部は直立気味のものからかなり開くもの、内湾するものまでさまざまであるがその高さは2cm前後に集まっている。天井部の回転ヘラケズリは3分の2から5分の4の範囲に広範に施されるが、胎土に多く含まれた大粒の砂粒が移動しているためかあまりていねいな感じがない。

坏身は5点ある。全形のわかるものはない。立ち上がりは直立して高く伸び口唇部内面に段の痕跡を残すものから、内傾して比較的高く伸び端部は丸く終わるものまである。受け部までのものは受け部が水平方向に伸びるものが多い。外面の回転ヘラケズリは3分の2から4分の3の範囲に施される。これらの蓋坏類の類例は県内ではめんぐろ古墳、荒神谷7号墳、奥才1号墳、中山2号墳、金崎9号墳などにもとめることができる。

頸は口縁は開くが頸部は太く、絞り目はない。口唇部には段をもつ。口縁部と頸部外面に波状文が施される。めんぐろ古墳の頸はかなり長頸化しているが、これはそこまで長いものではなく、古曾志大谷1号墳の頸に近い長さである。しかし細部は古曾志大谷1号墳例より甘い作りとなっている。

無蓋高坏はやや深めの坏部をもち、外面には2条の沈線が巡り、その下に波状文が施される。口縁端部は丸く作られる。これは凸帯にあたる部分が沈線化しており、古曾志大谷1号墳よりは下ると思われるが、山陰須恵器編年のⅢ期になると見かけないものである。

これらの須恵器のうち蓋坏類は形状から見れば時期差があるといってよいほど変化に富んだ内容をもっているし、頸や無蓋高坏はかなり古式をとどめる蓋坏に伴うものとも考えられる。しかし本古墳の埋葬施設はただ一つであり、しかも追葬する形式のものではないのである。したがってこれら造り出しの出土品は单一埋葬に伴う一括遺物と考えてよいものと思う。被葬者一代何十年かのうちに産みだされたものが数々用いられたとするなら、多少の形式差はあって当然なのかもしれない。これらの須恵器群は全体としては山陰の須恵器編年のⅡ期のうちに含まれてよいものと考えられる。

Ⅰ期の特徴のひとつとして蓋坏の口径の大型化ということがいわれているので、各遺跡出土の蓋坏の計測表（第2表）を報告書や論考をもとに作ってみた。それによればⅠ期の坏蓋は13cm前後であるが、Ⅱ期の坏蓋は14cm～15cmと確かに大きくなっている。器高はほとんど変わらない。本古墳のものはこの値より少しずつ前後にはみだすようである。Ⅲ期のうちの早い時期と報告されている岡田薬師古墳あたりもほぼ14cm代にあるが、Ⅲ期も新しい時期とされる池ノ奥4号窯になると11～13cm代とやや小形化し器高も低くなる傾向があるようである。

② 有蓋高坏について

長脚1段の透かしを3方向にもち、踏ん張って立つ作りの裾部に波状文の施される有蓋高坏は、蓋が3点、高坏本体が4点出土しているが、形態、手法、胎土、焼成、色調などほぼ同じと言ってよく、同一工人の手になり、同じ窯で焼成されたものと考えられる。

このような高坏の類例は県内ではなく、近畿地方に求めることができるが、近畿地方で

第2表 蓋坏計測表

遺跡名	坏裏		坏身		編年	備考	遺跡名	坏裏		坏身		編年	備考
	口径	高さ	口径	高さ				口径	高さ	口径	高さ		
東峰山古墳 (石室内)	12.9	4.8	10.8	5.4	1期	文献1	油ノ原4号窓 (床面下)もぐり込み	13.6	4.0				文献5 (床)
	13.2	5.4	10.9	5.2				11.4	3.9				
めんぐろ古墳 (石室内)	14.5	5.2	12.6	4.5	2期	文献2	油ノ原4号窓 (床面下)もぐり込み	13.2	4.0	10.2	3.1		
			13.2	5.2				12.8	4.9	10.6	4.1		
			13.4	4.6				11.3	3.4				
	15.0	5.1	12.7	4.8						10.6	2.8		
	14.8	4.8	12.4	4.6						9.0	3.8		
	15.0	4.8	14.0	4.9									
			12.5	5.2			(床面下より浮き)	13.0	3.4				
糸神谷7号墳	13.8	4.8	12.6	5.1	3期	文献1		13.8	3.1				
	14.3	4.9	12.7	4.8				13.8	4.7				
	14.4	5.1	12.3	4.5				12.6	4.2				
奥才1号墳 (石室内)	14.1	4.8	12.1	5.1	1期	文献3				11.1	4.1		
	14.0	4.9	12.8	5.5						10.6	4.3		
	13.9	4.5	12.1	5.8						11.6	4.1		
金輪8号墳 (石室内)	14.4	4.8	12.45	4.5	2期	文献1	伝字半加比光命 御陵古墳 (造り出し)	13.4	4.9				
	14.4	4.85	12.0	4.65				13.8	4.8				
	14.1	5.1	13.2	4.85						14.0	4.7		
岡田墓跡古墳 (石室内)	14.55	4.3	12.6	5.05	3期	文献4		14.9	4.9				
	14.45	4.95			(占)			14.7	4.6				
	14.0	5.1						14.0	4.7				
	14.2	4.9						13.2	5.0				
			12.4	5.3				13.6	4.5				
			12.1	4.7				15.7	4.1				
(盛土中)	13.5	4.7	12.0	5.4									
	14.1	4.1	12.6	5.0									
	14.25	3.8	12.0	4.7									
	12.7× 14.2	4.75	10.9× 12.5	5.2									
	14.4	4.05	12.15	5.2									

- 文献1. 欽宗寺雄「出雲地方東部の古式須彌壺について」
 　　(『紀行考古第6号』 1985年)
 2. 川原利人「浜田市めんぐろ古墳上の須彌壺について」
 　　(『鳥取考古学会論文集第2集』 1986年)
 3. 「鳥才古墳群」
 　　瀬戸町教育委員会 1985年
 4. 「岡田墓跡古墳」
 　　島根県教育委員会 1986年
 5. 「松江東工場跡地内発掘調査報告書」
 　　松江市教育委員会 1990年

も出土例は少ないようである。奈良県天理市のタキハラ5号墳は直徑12m程の円墳で、内部構造に初期横穴式石室をもち単葬墓とされている。その石室内の出土遺物（第21図）を見ると先の高杯はP₁に実に良く似ているが、P₅は口唇部が段をなしており、やや古い感じがする。報告では伊勢湾沿岸で作られた可能性の高いものとしているが、詳細は不明である。時期は6世紀初頭とされている。

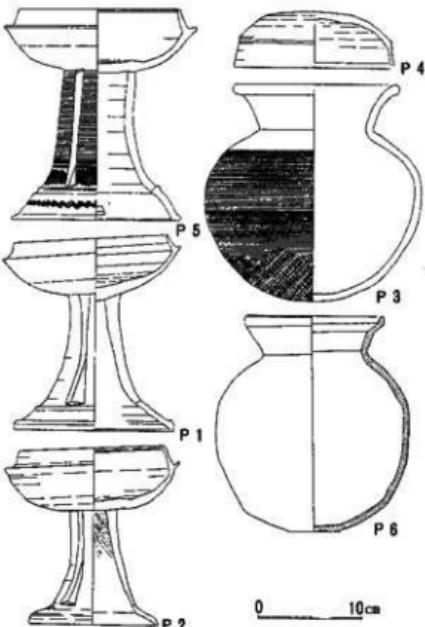
また大津市滋賀里太鼓塚古墳群中5号墳の横穴式石室内から同系統の有蓋高杯が出土している。これは脚部が一段と長いもので、透かし部分がはっきりと2段にわかれている。杯部の立ち上がりは内傾しており、口唇は単純に作られて

いる。そしてその時期は6世紀中頃よりやや新しいとされている。

以上の例を見ると、本古墳の有蓋高杯は近畿地方からもたらされたものではないかと考えられるのであるが、この報告書作成までには実物を比較したり胎土分析にかける機会が得られなかつたので、搬入品であるかどうかは不明である。その時期は形式的に見ればタキハラ5号墳例と太鼓塚5号墳例の間に位置するところの6世紀前半代が当たれよう。この年代観は有蓋高杯以外の器種で見た年代観と矛盾するものではない。

2) 円筒埴輪について

口縁部から底部まで復元できる個体がなかったので全形を窺うことが困難であり、2段タガのものか3段タガのものかそれぞれの個体について見分けることはできなかった。しかし、タガ部分の破片数が少ないと、2次調整のヨコハケをタガの上下両側に施した破片ではなく、片側は必ずタテハケが施されていることなどから、2段タガのものが多いのではないかと思われる。タガはしっかりした台形ではないけれども突出しており、底部再



第21図 タキハラ5号墳出土土器
(報告書より転載)

調整とともに、いわゆる出雲地方の地域性といわれるものを特徴としてもっている。基底部や口縁部の作りからみると、直立するものではなく逆「ハ」の字形に聞く形態のものがほとんどようである。焼成は土師質、須恵質両方あるが、土師質のものに黒斑はない。底部調整はすべての個体に認められる。外面は板オサエやハケメ、内面は指ナデや指オサエなどで再調整されて、断面形はU字状やV字状を呈しているものが大部分である。このような底部調整を行う円筒埴輪の類例には奥才1号墳、山代二子塚古墳、岡田山1号墳などがある。内外面ハケメ調整を行うものが1点だけあるが(第18図-3)、古曾志大谷1号墳例のように底端部を切断するものではなく、山代二子塚古墳出土例と同様にナデ仕上げのものである。奥才1号墳は須恵器縦年Ⅱ期、山代二子塚古墳はⅡ期新～Ⅲ期古段階、岡田山1号墳はⅢ期の築造になるものとされていることから、本古墳出土の円筒埴輪はⅡ期からⅢ期に用いられたものと同じ特徴をもつものと言えよう。

- 註1. 山本 清 「浜田市めんぐろ古墳遺物について」(『島根大学論集 7号』 昭和32年)
2. 山本 清 「荒神谷、後谷古墳」(『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』 島根県教育委員会 昭和50年)
3. 「奥才古墳群」 鳥取町教育委員会 1985年
4. 『中山2号墳、中山五輪塔群』 八雲村教育委員会 1980年
5. 房京寿雄 「出雲地方東部の古式須恵器について」(『松江考古 第6号』 松江考古学談話会 1985年)
6. 山本 清 「山陰の須恵器」(『島根大学開学10周年記念論集』 昭和35年)
7. 「岡田葉部古墳」 島根県教育委員会 1986年
8. 「池ノ奥窓跡群」『松江東工楽団地内発掘調査報告書』 松江市教育委員会 1990年
9. 『天理市石上・豊田古墳群Ⅱ』 奈良県文化財調査報告書 第27集 奈良県立橿原考古学研究所 昭和51年
10. 『滋賀里・穴太地区遺跡群発掘調査報告書I 大鼓塚古墳群』 大津市文化財調査報告書(12) 大津市教育委員会 昭和55年
11. 井上寛光 「出雲の円筒埴輪」(『松江考古 第5号』 松江考古学談話会 1983年)
12. 『風土記の丘地内跡跡発掘調査報告書』 山代二子塚古墳』 島根県教育委員会 1992年
13. 『出雲の岡田山古墳』 島根県教育委員会 昭和62年

V. まとめ

伝字牟加比光命御陵古墳は低丘陵尾根部に築かれた一辺16m、残存高2m余りの方墳で、内部主体には石囲いの木棺墓をもち、南辺に造り出しを付設するものであった。葺石はなく、墳頂部には円筒埴輪が立てられていたと考えられる。主体部の石囲いは簡略なもので、床面に礫や石ではなく、盛土の上層に造られていた。副葬品は鉄製刀子1口、鉄製長頸瓶15本があった。幅5m、長さ2mの造り出しには3本の円筒埴輪が底部を埋めて立てられ、造り出し上からは墓前祭祀に使われたと見られる丹塗り土師器や須恵器が数多く発見された。これらの遺物類は単一埋葬に伴う一括性のあるものと考えてよいであろう。

造り出し上の須恵器は山陰須恵器編年のⅢ期にあたるもので、同時期の近畿地方からの撤入品の可能性のある有蓋高杯を含んでいる。副葬品の鉄器や、造り出しの土師器、円筒埴輪についても須恵器と同時期として矛盾のあるものではなく、これらの出土遺物の年代観によりこの古墳の築造は後期前葉（6世紀前半頃）と推定されるのである。

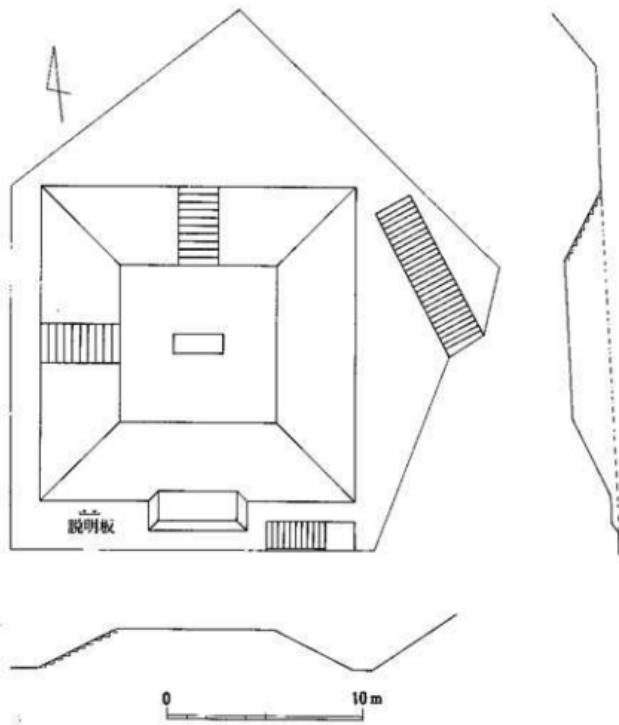
本古墳の副葬品は鉄製品のみであって土器などではなく、葬送の儀礼は造り出しで行われたと考えられる。しかし、この古墳と同じ6世紀前半頃に当地方で相前後して築造された荒神谷7号墳、奥才1号墳、中山2号墳などにおいては、すでに後期的な特徴である須恵器を副葬する方法が取り入れられ、葬送儀礼も変化しているのではないかと考えられるのである。ところが法吉地区で6世紀前半に中心的な位置を占めるこの古墳では依然として中期的な埋葬方法が採用されている。法吉地区的古墳で須恵器を副葬する例は横穴式石室を導入して造られた岡田薬師古墳が今のところ最も古い。本古墳は古曾志大谷1号墳に見られるような造り出して葬送の祭禮を行ういわば古式の風習を受け難いだ注目すべき調査例であると言えよう。

須 恵 器 観 察 表

標題番号	器種	法 直 (cm)	形 異・手 法 の 特 徴	物 七	焼成 色 調	備 考
15-1	环 直	口 径 13.4 高 度 4.9	破はやや大きく、口底尚直。口唇に段あり。天井部丸く、回転ヘラケズリ2/3。	1mm前後 の砂粒多	良好 淡青灰色～暗灰色	造り出し出土
2	*	口 径 13.8 高 度 4.8	破は少しお殊と茶びる。口底尚直気味。口唇に段。天井部やや平坦。	白色小砂 粒を含む	外側：青灰色 内向：淡灰色	
3	*	口 径 14.9 高 度 4.9	破は丸柱を帯びる。口唇は削き気味。口唇に段。天井部はやや丸く、回転ヘラケズリ3/5。	1~3mm の大砂粒 多	淡灰色～暗灰色	
4	*	II 径 14.6 高 度 4.6	破は丸柱帶びる。口唇は開きつつ内凹する。口唇に段。天井部は丸く、回転ヘラケズリ4/5。	小砂粒多	灰褐色～淡青灰色	
5	*	口 径 14.0 高 度 4.7	様は純く。口唇は内凹しつつ下る。口唇に段。天井部はやや丸く、回転ヘラケズリ3/4。	1mm前後 の砂粒を 含む	灰褐色～淡青色	
6	*	口 径 13.2 高 度 5.0	頭の部分は沈継状。II線は内凹しつつ下る。口唇に段。天井部は丸く、回転ヘラケズリ3/4。	小砂粒を 含む	灰褐色～淡青灰色	
7	*	II 径 13.6 (器 高) 4.5	頭の部分は沈継状。全体に丸く作る。口唇に段。回転ヘラケズリ2/3。	1~2mm の大砂粒 多	暗灰色～淡青灰色	
8	*	口 径 15.7 高 度 4.5	頭の部分は沈継。口縫部やや外反。天井部広く、回転ヘラケズリ4/5。	1~2mm の大砂粒 多	淡灰色～暗灰色	
9	环 身	受部径 14.4	改い体出。環子のつくり。たちあがり片の端部はやや丸。回転ヘラケズリ2/3。	1mm大の 砂粒多	暗青灰色	
10	*	受部斜 14.2	厚手のつくり。受部は水平に伸びる。たちあがり片の端部はやや丸。回転ヘラケズリ2/3。	白色微 粒含	淡青灰色	
11	*	受部斜 14.1	厚手のつくり。受部は水平に伸びる。口唇へ ケズリ3/5。	1~2mm の大砂粒 多	外面：黑色 内向：暗青灰色	
12	*	たちあがり高 1.9	小片。厚手。立するたちあがり。口唇に段の 窓跡。受部は水平に伸びる。	白色微 粒含	青灰色	
13	*		受部の小片。受部は水平に伸びる。	密	青灰色～黑灰色	
14	勝	口 径 12.2 口 窓 高 6.1	口唇は圓く。窓基部は太く、しばり目はない。 口唇に段。疲状。	*	青灰色～淡灰色	
15	加 箱 直 (口 径)	16.2	やや深めの底型。口縫端部は丸い。外側に沈継 2条と疲状。	1mm末端 の砂粒合	淡灰色～淡青灰色	
16	壓		端部片。長頸。	密	淡灰色	埴土～焼成 出土
17	*		端部片。外側中行タキ。内面同心円。	*	淡青灰色	
18	*			*	青灰色	
16-19	高环直	口 径 15.4 高 度 4.75	薄手。腰の部分は沈継。口唇に段。半坦な天井 部につまみの痕跡。	1~2mm の大砂粒 多	外面：黑色 内向：青灰色	造り出し出土
20	*	II 径 15.8	沈継。口唇に段。	1mm前後 の砂粒合	青灰色～暗灰色	
21	*	(II 径) 15.0	*	*	外向：青～淡灰色 内向：青灰色	
22	有 高 箱 直	口 径 13.5 受部斜 16.1 度 14.4 高 度 15.0	脚部、二方一段の長方形透かし。裾部との境に 段。脚部に疲状。窓部内底面に同心円形当具痕。 たちあがりは内傾上方に伸び。口唇はや や丸。	1mm大の 砂粒多	外面：黑色～黑 灰色 内向：青灰色	
23	*	口 径 14.0 受部斜 16.6	环部斜。たちあがりは内傾後、上方に伸びる。 口唇はやや丸。24と同一個体か。	1~2mm の大砂粒 多	青灰色～暗灰色	
24	*	底 径 15.0 高 度 11.0	三方一段の長方形透かし。裾部との境に沈継。 裾部に疲状。窓部内底面に同心円形当具痕。	*	外面：黑色～淡灰色 内向：淡灰色～淡 青灰色	
25	*	底 径 14.4 高 度 11.8	三方一段の長方形透かし。裾部との境に沈継。 裾部に疲状。窓部内底面に同心円形当具痕。	*	淡青灰色～黑灰色	
26	*	底 径 14.4 高 度 10.8	三方一段の長方形透かし。裾部との境に沈継。 裾部に疲状。窓部内底面に同心円形当具痕。	*	淡青灰色～黑 灰色	

円筒埴輪観察表

標図番号	法量(cm)	形態・成形・調整の特徴	底部調整	焼成・色調	備考
18-1	底 径 16.0 基底部高 9.0	横円形透かし。合形状タガ。 内外面ナナメハケ。	外面: 板オサエ 内面: 指ナデ、指オサエ	淡褐色	造り出し 樹立
2	底 径 15.5 基底部高 9.0	円形透かし。合形状タガ。 外曲面減。内面ナデ。	外面: 磨減 内面: 指ナデ	軟質 赤褐色～淡褐色	*
3	底 径 17.0 基底部高 13.0～16.0	逆時計まわりの巻き上げで成形。横円形 透かし。合形状タガ。内面ナデ。胴部に 二次調整のヨコハタ。	外面: タテハケ 内面: ナナメハケ 底面: ナデ?	赤褐色	*
4	底 径 16.8 基底部高 11.0	厚手。台形状タガ。外面タテハケ。内面指 ナデ。	外面: 磨減 内面: 指ナデ、指オサエ	褐色	盛土流れ 込み層
5	底 径 18.0 基底部高 10.0	横円形透かし。合形状タガ。底端部は外 に反る。	外面: ナナメハケ 内面: ナデ?	淡褐色	南側埴輪
6	底 径 15.2 基底部高 8.2	厚手。台形状タガ。横円形透かし。内外 面タテ～ナナメハケ。	外面: 板オサエ 内面: 指ナデ、指オサエ	淡褐色	*
7		外曲面減。内面ナデ。	外面: 板オサエ 内面: 指ナデ、指オサエ	やや軟質 褐色	*
19-8	(口径) 23.9 口縁部高 9.5	逆「ハ」の字形に開く。タガはM字状に 近い。横円形透かし。外表面タテ～ナナ メハケ。胴部に二次調整のヨコハケ。		淡褐色	西側埴輪
9	(口径) 26.8 口縁部高 9.2	逆「ハ」の字形に開く。タガは上端が突出。 横円形透かし。内外面タテ～ナナメ ハケ。胴部に二次調整のヨコハケ。		淡褐色～灰褐色	南側埴輪 西側埴輪
10	(口径) 24.6	逆「ハ」の字形に開く。内外面タテハケ。 口縁部ヨコナデ。		桃褐色～淡褐色	南側埴輪
11	(口径) 25.6 口縁部高 10.0	逆「ハ」の字形に外反して開く。合形状 タガ。外面タテハケ。内面ナナメハケと 指オサエ。		やや軟質 赤褐色	*
12	口 径 25.6	逆「ハ」の字形に開く。外面タテハケ。内 面ナナメハケ。口縁部ヨコナデ。		表曲面灰色 断面暗青灰色	*
13		円形透かし。M字状タガ。外面タテハケ。 内面ナナメハケ。胴部に二次調整のヨコ ハケ。		表面褐色～暗 茶灰褐色 断面暗青灰色	東側埴輪 南側埴輪
14	(底径) 12.4 基底部高 9.8	タガは台状。外面タテハケ。内面ナナメ ～ヨコハケ	外面: 板オサエ 内面: 指ナデ、指オサエ	表面茶褐色 断面暗青灰色	南側埴輪
15		逆「ハ」の字形に開く。台形状タガ。円 形透かし。外面タテハケ。内面タテ～ナ ナメハケ。		褐色	*
16		円形透かし。台形状?タガ。 内外面タテ～ナナメハケ。		淡褐色	西側埴輪



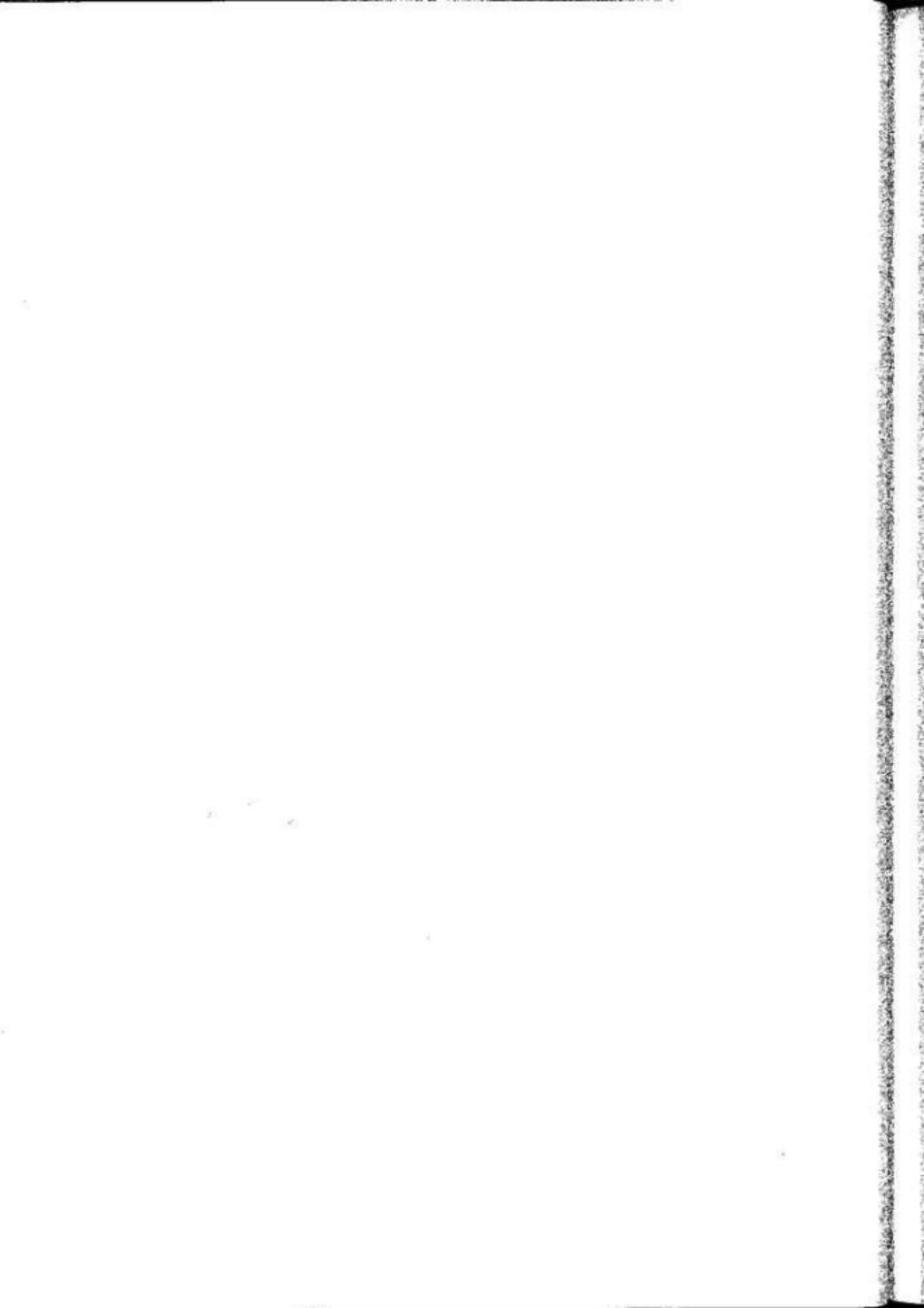
伝宇摩加比充命御陵古墳
この古墳の大きさは、一边約一六
m、高さ約二尺の方墳（四角形の盛
土）で雨蓋に祭壇が造られていました。
○年前に造られたと思われます。

古墳の頂上には石で囲われた木棺
がありました。長い年月の後、木棺
が腐ってしまって、まわりの石しか
残っておらず、一部は盗掘されていま
した。石で囲われた埋葬施設（遺体を置
いた所）からは鉄でできた刀子（ナ
イフ）、一本、鐵鏡（矢じり）、一本、
が、また祭壇から円筒埴輪や須恵器
（一〇〇〇度以上の高温で焼いた青
灰色の土器）が出土しました。ここ
から出土した須恵器は時期的に県内
では珍しく、美田市のめんぐう古墳、
松江市佐草町荒神谷古墳が出土例と
してあります。

この古墳の名前は、宇摩加比（比
夷）が法吉鳥（ほふきどり、うぐい
すのこと）となって、鷦谷に降りた
ったという出雲國風土記（奈良時代
に書かれてある「法吉」の地名起源
説）にちなんで名づけられたもので
す。

第22図 移築復元図と説明板

図 版



図版 1

調査前（南から）



調査前（北から）

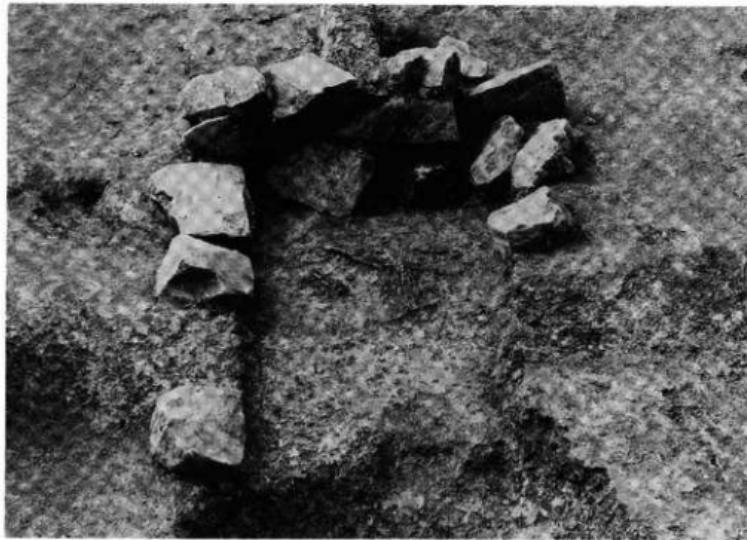


主体部検出状況





主体部（北から）



主体部（東から）

主体部（東から）



主体部内
遺物出土状況



西側墳裾





主体部と造り出し



造り出し遺物
出土状況（東から）



同上
(南から)



造り出し遺物出土状況



同 上



同 上



造り出し東端の
円筒埴輪



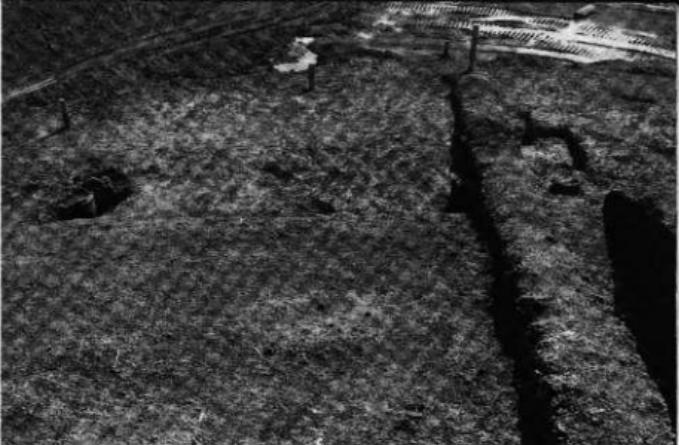
造り出し西端の
円筒埴輪



墳丘上から転落した
円筒埴輪

図版 7

造り出し（北から）



造り出し（東から）



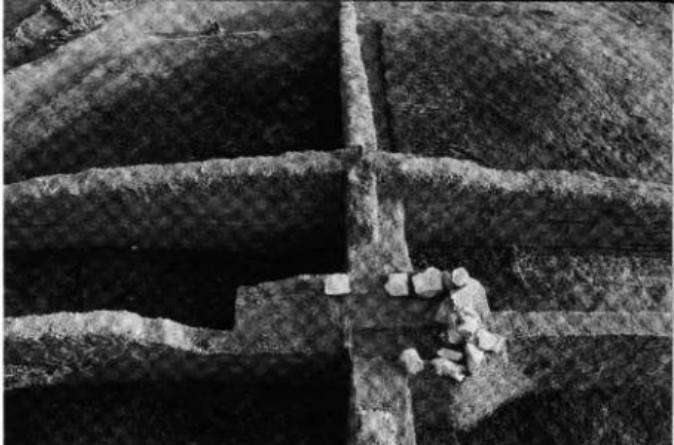
墳丘盛土



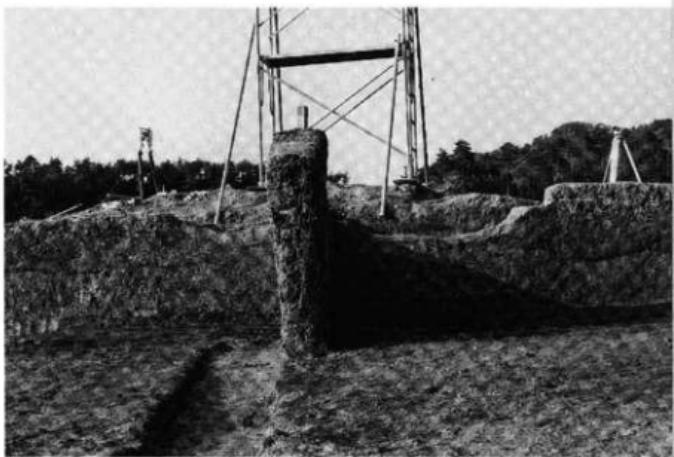


填丘西半土层断面

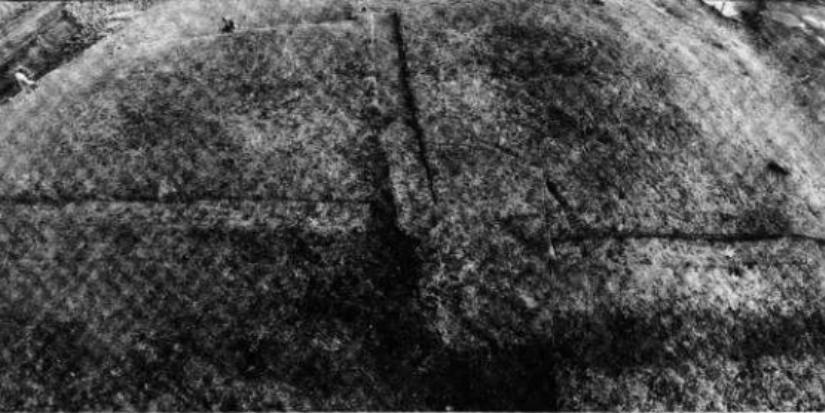
墳丘基盤と盛土と主体部の関係



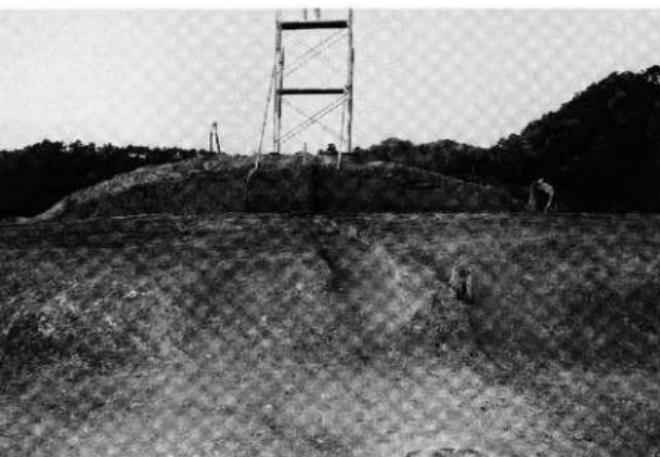
主体部直下の盛土の状況



同上



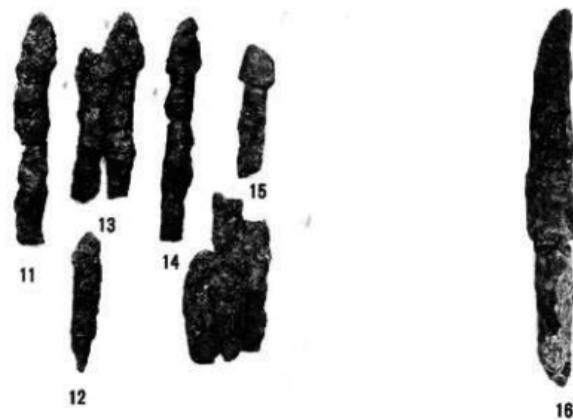
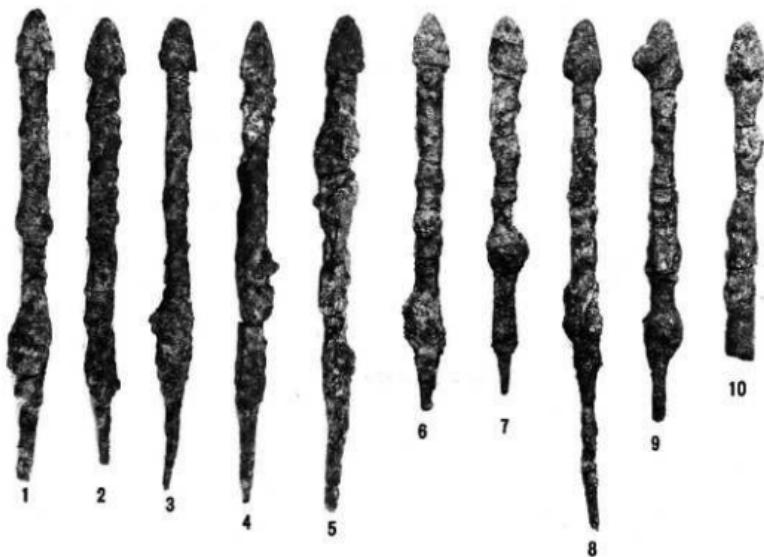
填丘基盤



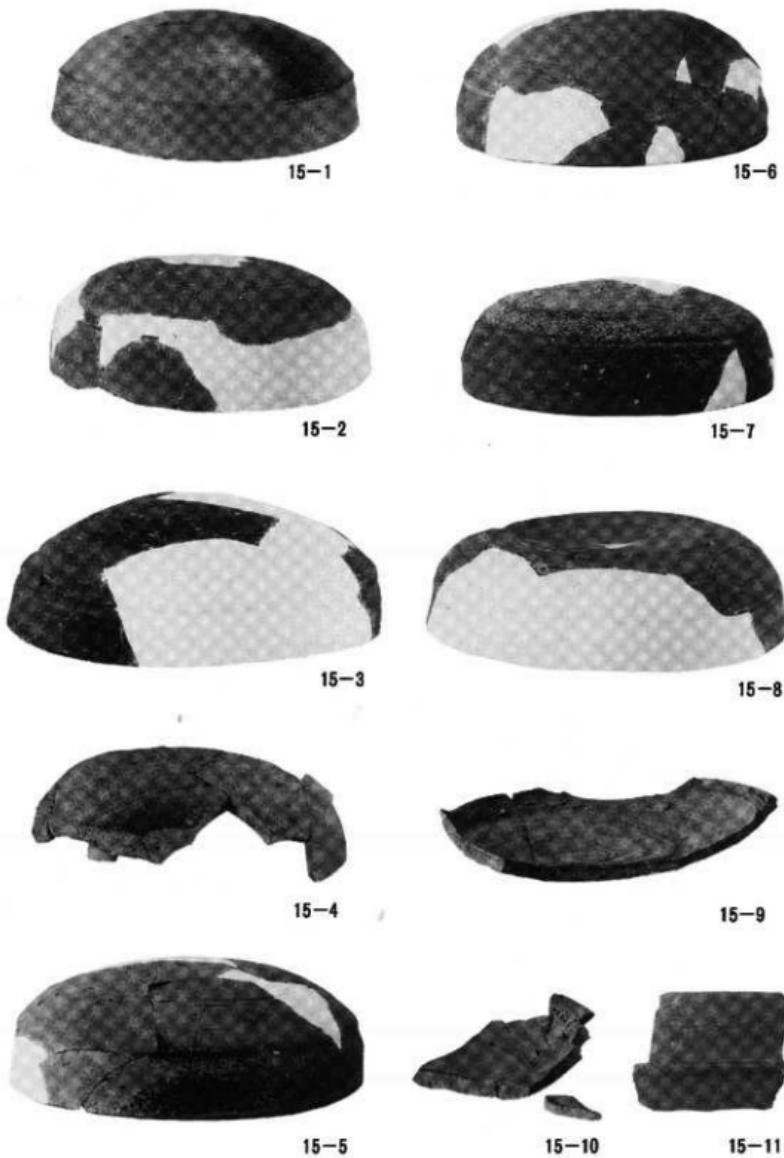
調査後



調査指導会



主体部内出土遗物



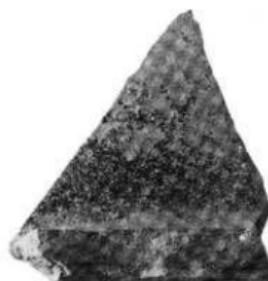
造り出し出土須恵器



15-12



15-14



15-16



15-17



15-18



15-15



15-19



15-20



15-21

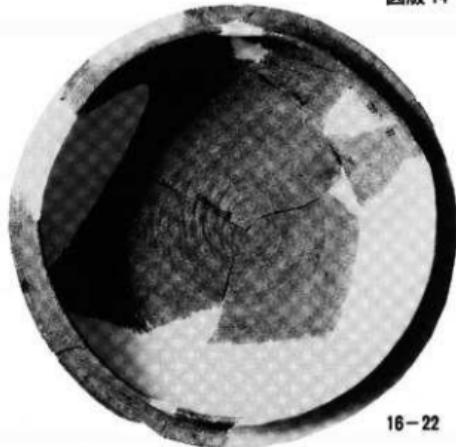


15-22

造り出し出土須恵器



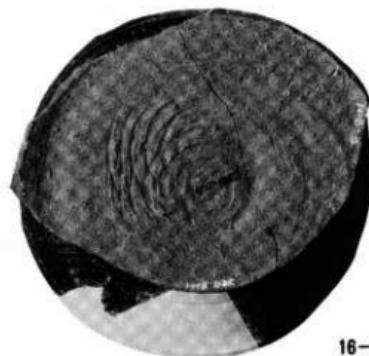
16-22



16-22



16-24



16-24

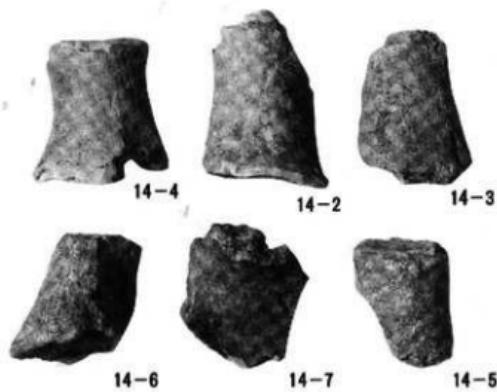
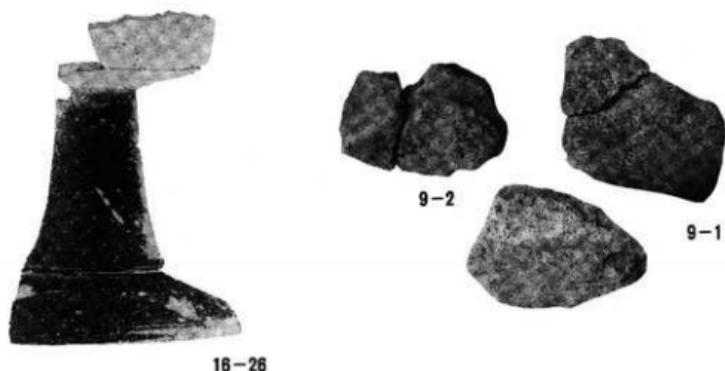


16-25



16-25

造り出し出土須恵器



造り出し出土須恵器、土師器、
盛土中出土弥生土器、土師器



18-1



18-2



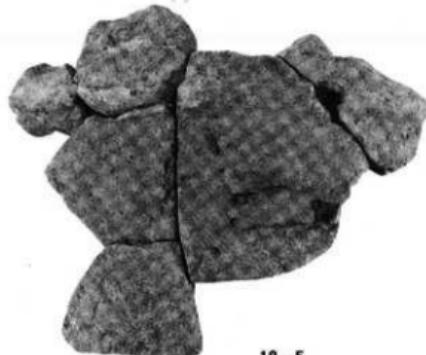
18-3



18-4



18-6



18-5



18-7



19-8



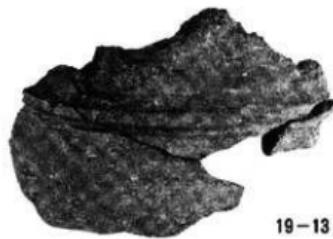
19-9



19-12



19-11



19-13



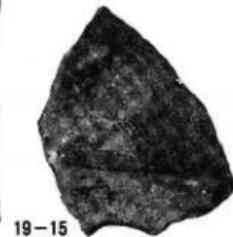
19-10



19-14



円 筒 壁 輪



19-16

$$E = \frac{v_0}{f_0} - C$$

伝字牟加比壳命御陵古墳
報告書

1993年3月

発行 松江市教育委员会

印刷 有限会社 谷口印刷
松江市母衣町89